

長寺遺跡の弥生人骨

—第10次調査に伴う中間報告書—

1996

天理市教育委員会



頭蓋骨の出土状況



頭蓋骨

序 文

天理市は、有数の古墳地帯であり、古代の歴史を語るには欠くことのできない舞台でもあります。本市は、古墳をはじめとして、先人たちにより守り伝えられてきた豊富な文化財に恵まれていますが、こうした歴史的遺産を保護し、くらしに生かす町づくりを目指すとともに、後世に伝えていくことが私たちの大きな責務であります。

長寺遺跡から出土した弥生人骨は、きわめて良好な条件で依存しています。そのため骨格や形質を調べることで、弥生人の姿・形を復元するだけではなく、骨のデータから弥生時代の人々が営んできた習慣や食生活など生活様式を知ることができ、歴史的にも貴重な資料といえます。

ここに、その調査成果について報告をいたしますとともに、本書が多くの人々に生きた歴史資料として広く活用されることを願うものであります。

最後になりましたが、調査にご協力いただいた土地所有者ならびに地元の方々、また人骨の鑑定をいただいた研究者の方々には、多大なご助力をいただき心よりお礼申し上げます。

平成8年12月

天理市教育委員会

教育長 金澤 遼

例　　言

- 1 本書は、奈良県天理市様本町1848番地の発掘調査で出土した長寺遺跡の弥生人骨について報告を記したものである。
- 2 発掘調査は、平成5年度の国庫補助事業として、平成5年5月24日～7月23日にかけて天理市教育委員会がおこなった。
- 3 現地調査は松本洋明が担当し、調査補助ならびに遺物整理は下記の方々の協力を得た。
名倉　聰（花園大学OB）　西村　広（花園大学OB）
中森　軍之助　中森　富美子　西岡　松枝
- 4 井戸から出土した人骨の鑑定は、京都大学大学院理学博士　片山一道氏に分析を依頼し、第4章・長寺遺跡の弥生人骨について執筆をお願いした。
また木製品の図面作製を権原考古学研究所・名倉　聰氏がおこない、第3章・出土遺物について木器類の執筆を依頼した。
- 5 本報告書の編集は松本洋明がおこない、執筆者名を目次に示した。

目　　次

第1章　遺跡の位置と景観.....	(松本)	1
第2章　井戸遺構(SE-2)	(松本)	5
第3章　出土遺物		
(1) 土器について.....	(松本)	10
(2) 木製品について.....	(名倉)	13
第4章　天理市長寺遺跡で出土した人骨、弥生人の遺骨か？.....	(片山)	18
〈付記〉奈良県天理市長寺遺跡から出土した人骨の年代測定…(中村)		31
第5章　おわりに.....	(松本)	32

挿図目次

図1 天理市の位置図.....	1
図2 長寺遺跡の位置図.....	2
図3 長寺遺跡の調査地点図.....	4
図4 第10次調査区平面図と断面図.....	6
図5 SE-2・井戸遺構の見通し断面図	8
図6 SE-2・井戸の遺構出土状態平面図	9
図7 SE-2・井戸遺構出土土器	10
図8 SE-2・井戸遺構出土土器	11
図9 SE-2・井戸遺構出土土器	13
図10 SE-2・井戸遺構出土木製鋤	14
図11 SE-2・井戸遺構出土木製品	15
図12 SE-2・井戸遺構出土木製品	17
図13 長寺遺跡で出土した人骨の身体の部位.....	20
図14 長寺遺跡で出土した人骨の復顔図.....	28

表 目 次

表1 脳頭蓋の計測値と示数.....	25
表2 顔面頭蓋の計測値と示数.....	25
表3 長寺弥生人骨の頭蓋形態小変異.....	26
表4 椎骨および胸骨の計測値.....	27
表5 上肢骨の計測値.....	26

写真目次

写真1 調査風景.....	3
---------------	---

第1章 遺跡の位置と景観

(1) 長寺遺跡の周辺

奈良県天理市の北部に所在する櫟本町は旧添上郡の市場町として発展し、近世には東大寺の朱印地として栄えた。地形的には奈良盆地の東山麓から派生した東大寺山丘陵（標高134m比高60m）の先端に広がる榆川と高瀬川に挟まれた扇状地に位置している。現在は奈良盆地の東山麓から派生する高瀬川に沿って西名阪国道が開通し、天理インターチェンジが設けられるなど、東大寺山丘陵の南に面した山間部にはシャープ総合開発センターが建設され、かつての大和の牧歌的な農村風景がそこなわれつつある。

櫟本の地名は古代の莊園文書に現れ、平安時代の後期にかけて東大寺と興福寺を主体に長寺廃寺の莊園が展開し、興福寺の末寺であったことが知られて

いる。当時は櫟莊（いちい）とも呼び、櫟本莊とどのように区別していたか定かでないが、古事記には“櫟井の丸爾坂（イチイのワニサカ）”の記述があり櫟の地名がかなり古くから用いられている。また櫟本町の東にある丘陵地帯は、かつて杉の大木が茂る東大寺の貯木林であった。地名には小字に東大寺の字名がなく、通称として東大寺山の呼び名が存在し、朱印地時代のなごりを現在に留めている。ところで東大寺山のふもとには和爾下神社がある。また櫟本町の北方、和爾町には和爾を氏神に祭る赤坂比古神社があり、大和を代表する古代豪族の和爾氏に由来をもつ地域である。とりわけ東大寺山丘陵には東大寺山古墳（全長140m前方後円墳）をはじめ、和爾下神社古墳（全長110m前方後円墳）、赤土山古墳（全長103.5m前方後円墳）、など全長100mを越す古墳時代前期の大型古墳群が出現し、和爾氏の拠点として注目されるところである。長寺遺跡はこうした歴史的景観を背景にもつ弥生時代から江戸時代にいたる典型的な複合遺跡で櫟本町の市街地が広がる北半部に所在している。



図1. 天理市の位置図
(奈良県全図)

(2) 調査地点と遺跡の概要

a) 弥生時代

弥生時代中期後半から古墳時代前期にかけて集落が展開する。ただし弥生時代中期末から後期の前半にかけて衰退し、集落は断続的に営まれたようである。遺跡には東大寺山丘陵の山麓から東西に延びる谷筋状の地形が二条ある。第7次調査地点から第3次調査地点



図2. 長寺遺跡の位置図 ($S=1/10,000$)

にかけては、北筋の谷地形、第10次調査地点で検出した南筋の谷地形がある。長寺遺跡の弥生集落はこうした谷筋を挟みながら両岸に広がるなだらかな尾根筋上に立地し、中世の頃までは長寺遺跡の周辺が起状のある地形をよく留めていた。ところで長寺遺跡には弥生時代中期の末頃から後期の前半にかけて集落を営んでいた痕跡が認められない。弥生時代後期にかけて集落の断絶が推測される。東大寺山の丘陵上に出現した東大寺山遺跡は弥生中期末から弥生後期にかけての環濠を築いた高地性集落で、長寺遺跡の断絶期と重なるため、両遺跡の関係には興味深いものがある。

b) 古墳時代

弥生時代後期末から古墳時代前期にかけて再び長寺遺跡の活動は活発になる。しかし井戸や土坑、溝など生活遺構が広範囲に展開する弥生時代中期に比べると、古墳時代前期の生活遺構は局部的な展開をみる。とりわけ第4次調査では一辺30m前後の墳丘の輪郭と幅8m、深さ1.5mの周濠をもつ方墳（長寺1号墳）を検出し、古墳時代の初め頃に古墳又は大型墳丘墓の構築が長寺遺跡においてなされている。ところで天理市南部から桜井市にかけて所在する柳本遺跡や纏向遺跡は、墳丘墓や前期古墳を構築しながら古墳地帯として大和・柳本古墳群へ飛躍的な展開をみる。長寺遺跡の場合も遺跡の東方にある東大寺山丘陵において前方後円墳を中心とした前期の大型古墳群が出現し、長寺1号墳からさらに大型古墳群へ発展した経過をたどることができる。

第3・5・7・8・12・14次調査では、古墳時代中期から後期にかけて径20m前後の円墳や方墳の痕跡を5基検出している。集落遺跡として展開した長寺遺跡であるが、古墳時代中期から後期になると古墳地帯に変貌し、古墳群の形成が東大寺山丘陵だけでなく、長寺遺跡が所在する山麓部まで広がっていたものと思われる。

c) 奈良時代

平安時代後期の文献に長寺の記載が見られ、当時は興福寺の末寺であったことが推測され、櫻庄に寺領をもつ寺院であった。長寺遺跡では櫻木公民館の建設に伴う第1次調査や隣接する第8・14次調査では寺院に関わる柱穴遺構を、また遺跡の中央部にある高良神社（第2次調査）で多量の瓦類を含む包含層を検出し、寺院の中心部が高良神社の付近に所在していたものと推測される。とりわけ第8・14次調査では、寺域の北辺を区画する2条の東西溝を調査し、長寺庵寺の北限と考えられる。調査では7世紀後半頃の古瓦も出土しており、長寺の創建時代を示す資料と考えるが、寺域の範囲や構造などは不明な点が多い。



写真1. 調査風景

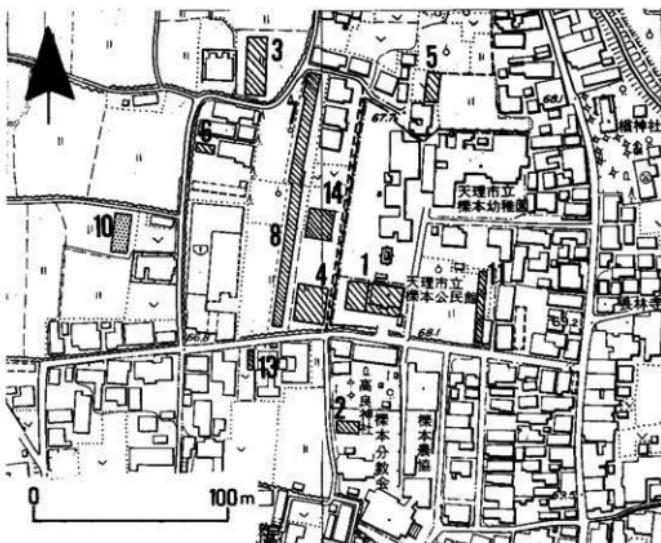


図3. 長寺遺跡の調査地点図 ($S=1/2500$) 数字は調査次数を表す

(3) 調査地点

長寺遺跡では近年宅地造成が頻繁におこなわれ、昭和56年から平成6年まで14次にわたって櫻原考古学研究所と天理市教育委員会が発掘調査をおこなっている。本報告にともなう天理市櫻本町1848番地で実施した第10次調査も、農地を宅地に転用するため事前調査として国庫補助をもとに発掘を実施したものである。第10次調査地点は櫻本町の町並から北方の外れに所在し、櫛町に接近したJR桜井線の櫻本駅から北東100mの所で、地形的には東山麓から盆地の平坦に向かって緩やかな傾斜をもちながら、階段状の水田が広がる標高66mの田畠地帯である。遺跡の中央部を中心に調査を継続させてきた第1～8次調査に比べて第10次調査地点は長寺遺跡の西端部にあたり、弥生集落などのあたりまで広がっているのか興味深い場所である。弥生時代中期になると、大和の弥生集落には環濠が出現し、集落の周りに大溝をめぐらせた遺跡も多く、長寺遺跡においても集落の縁辺部に環濠に相当する大溝がめぐっていた可能性がある。第10次調査地点は遺跡の景観や範囲を検討するうえに重要な地点でもあった。発掘は、宅地開発地の東半部において南北20m、東西7mにわたって調査区を設定し、耕作土や耕作とともに床土部分を重機で掘り下げ、中世の遺物を含む包含層のあたりから手掘りによる調査をおこなった。

第2章 井戸遺構(SE-2)について

(1) 遺構の所在と景観

第10次調査では、奈良・鎌倉時代から弥生時代後期末～古墳時代前期、弥生時代中期後半の3面にわたって遺構の検出を繰り返している。また調査区の全面にわたって南東から北西方面に流れる谷筋地形を検出し、時代によって谷筋の落ち込みは変化している。井戸(S E - 2)を検出した弥生時代中期の後半は、幅20mほどあるなだらかな落ち込みを形成した谷筋があり、検出した地山の上面から深さ1.5mまで掘り下げ中期後半の土器類を包含した砂礫層(図4-弥生中期の砂礫層)を検出している。砂礫は水流の痕跡と考えられるが、谷筋の南岸に沿って幅2m、深さ50mにわたって流路を形成している。井戸遺構は谷筋の北岸にあたる斜面(調査区の北半部)にあり、谷筋を流れる水際に設けられた井戸である。

弥生時代後期末から古墳時代前期(庄内期)は谷筋の落ち込みが1mほどで、弥生時代中期の頃と比べてやや浅くなっている。谷筋の南岸に沿って幅1m、深さ30cmの砂礫層(図4-庄内期の砂礫層)が堆積し水流の痕跡が認められる。砂礫層には古墳時代前期(庄内期)の土器類が包含されている。この時点になるとS E - 2が所在した井戸の地点に大形土坑1が重なって設けられている。調査では大形土坑1の発掘中に井戸(S E - 2)の存在を確認したもので、遺構の検出を試みる過程で事前に井戸の輪郭を予測していたものではない。弥生時代から古墳時代前期にかけて水流が認められた谷筋地形であるが、古墳時代の前期の後半(布留期)になると砂礫層がなくなり、谷筋に水流の痕跡を認めることができない。さらに奈良時代まで暗茶色土による腐食土の形成が続き、徐々に谷筋の落ち込みが浅くなり弥生時代のような起状のある地形とは異なり、調査地点の景観がかなり変化している。奈良・鎌倉時代の遺構は谷筋地形の上層に堆積していた暗茶色土(包含層)の上面から検出しているが、調査では暗茶色土上面から遺構の検出は難しい。調査区の中央部では暗茶色土をある程度掘り下げた包含層中から、また谷筋の両岸にあたる調査区に端部では地山面まで掘り下げてから、柱穴をともなう奈良時代の建物遺構を2棟、溝1本、鎌倉時代の井戸1基(S E - 1)を検出した。

また谷筋地形に堆積していた土壤から花粉分析を試みた所、弥生時代中期にかけて樹木花粉が目立ち、コナラ属アカガシ亜属(カシ類)を中心とする照葉樹林が谷筋の周辺に多く分布していた様子が推測され、樹木の茂る木陰に覆われていたイメージが求められる。人骨が出土した井戸(S E - 2)はこうした樹木に覆われていた谷筋に掘り込まれた遺構で、井戸の内部に堆積していた粘土層にはクワやイラクサ科などの雑草の花粉が目立ち、井戸の所だけが日照の差し込む開けた状態であったとも思われる。その後、古墳時代前期になるとイネ科やヨモギ属の花粉が目立ち、樹木が際立って減少している。樹木が活発に繁殖

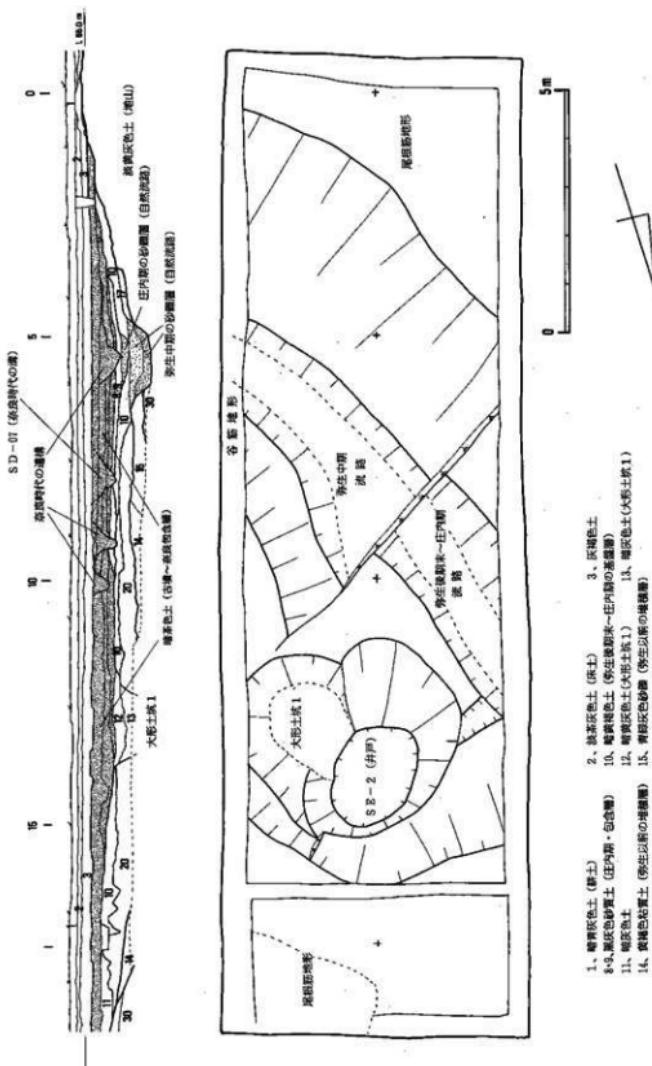


図4. 第10次調査区平面図と断面図 ($S=1/100$)

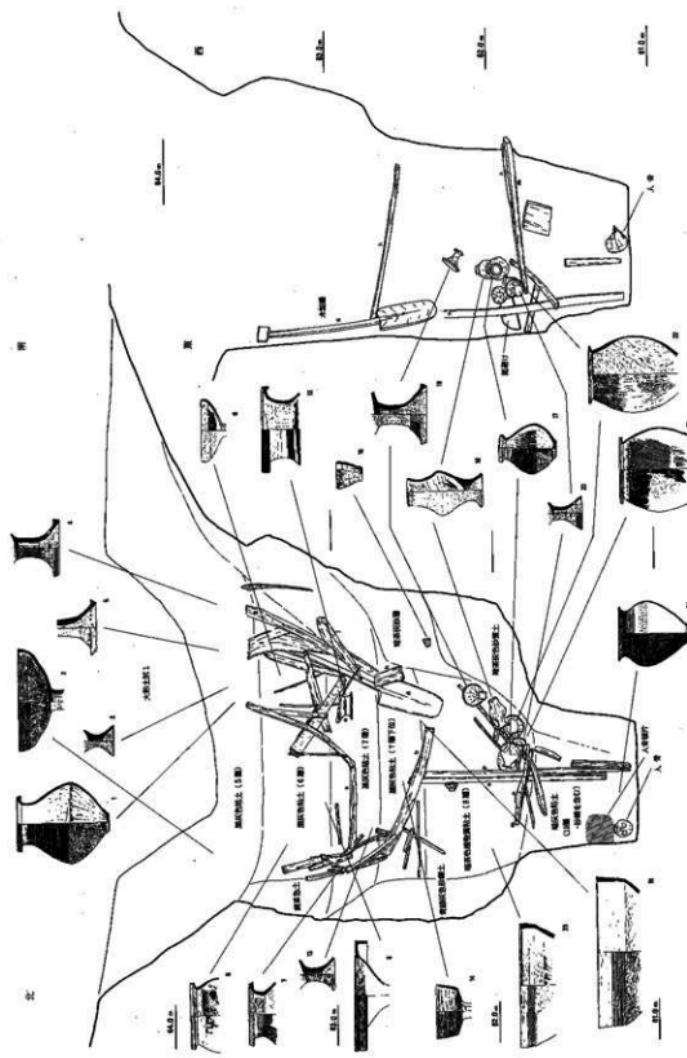
し木陰に広く覆われていた弥生時代中期に比べ、古墳時代になると雑草が繁殖し、日照のある開けた土地に変化しつつあったものと思われる。

(2) 井戸の構造（図5参照）

調査区の北西部、谷筋地形の北辺側斜面にかけて井戸（SE-2）遺構を検出した。井戸の規模は上面が南北5.1m、東西（推定）2.9mあり、形態は谷地形に直交するかたちで橿円形の開口部を設けている。しかし古墳時代前期の大形土坑1が井戸遺構と重複している。そのため井戸の東側に面した開口部の輪郭は大形土坑1の擾乱をうけている。井戸は弥生時代中期後半の末頃（大和第IV様式）になると、すでに機能を失い埋没しつつあったものと推測するが、古墳時代に再び谷筋の水溜場として掘削をうけている。井戸の形態は中位で南北2.0～2.2m、東西1.2～1.6mの橿円形、さらに下位では輪郭が南北0.75～1.0m、東西0.75～1.1mのやや円形に近い井筒状になり底面に達している。井戸の深さは尾根筋側にあたる北辺の検出面から3.4mに達し、深い掘り込みをもつ。井戸の上位は深さ1mほどで逆台形状に開き、中位から下位にかけて南北断面図をみると逆凸状になっている。しかし井戸中位の北壁や西壁の一部は袋状になっており、埋没の過程で壁面が崩落した可能性がある。おそらくは井戸の中位から下位にかけて北・西壁面は井戸底まで直線的に掘り込まれていたものと推測する。一方、井戸の南面は中位と下位の境目（8層と10層の境目）に明瞭なテラスがあり、テラスに面して2本の横板（図5-m・n）を並べている。建築部材の一部を転用したものと思われる。おそらくは足場板のような役割が推測され、テラスが井戸の構造になんらかの機能をはたしていたものと考える。また井戸の平面形態が橿円形になっている。これは井筒状に掘り込んだ北・東・西壁面に対して、中位南面にテラス部を設けていたことが要因と思われる。水汲みや井戸内部の整備など、足場板がなんらかの役割をもっていたものと考える。なお中世の井戸では、こうしたテラスを井筒の周囲に築き、井戸枠の足場として構築する場合がある。この調査で検出した井戸（SE-2）には井戸枠の抜き取りにともなう擾乱や痕跡が認められず、素掘りで築いた井戸と判断する。

(3) 遺物の出土状況

井戸の上位（5層）から中位（6～8層）、下位（10層）にかけて、主に土器と木製品や木片が出土している。井戸の中位と下位の境目にはテラス状の段が設けられ、テラスに並行して2本の足場板（図5-m・n図12）が用いられている。足場板の直上には完形の土器類2点（図8-17・18）をはじめ甕や高环の破片が集中している。井戸祭祀にともなう痕跡かもしれない。また東壁面に接して農耕具の泥除も完形品（図11-a）で出土している。中位から下位（図5-8・10層）にかけて、井戸の東壁面に沿って長さ1.2～1.5mの角材（図5-o・p）が打ち込まれている。用途は不明だが、井戸の下半が粘土層（図5-8・10層）で覆われていた階段に井戸底まで深く打ち込んだものと推測する。井戸の中位



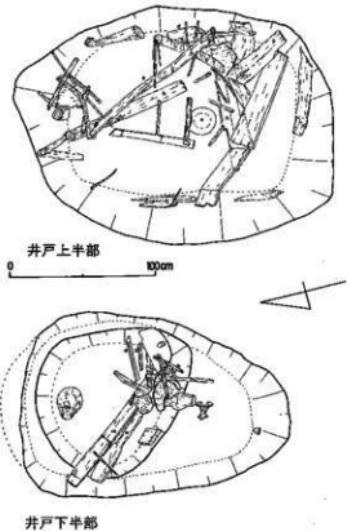


図6. SE-2・井戸の遺物出土状態平面図 (S=1/30)

上半(図5-6～7層下位)にかけて多数の木材や自然木、板類などが出土している。井戸の側面に沿って板材などが集中し、故意に並べられていた可能性がある。中でも完成にほど近い鋤の未製品が混じって側面から出土している。井戸が埋没はじめた中位上半にかけて、木製品の加工にかかる貯蔵穴として利用していた可能性もある。また破損した土器類も同層位から多数に出土しており、廃棄物が目立つ。一方、井戸の下位(図5-10層)は、甕(東海系)1点と人骨に限られる。また粘土層中には砂礫が混じり、溺水の痕跡が認められる。水汲み場として井戸が機能していた段階に堆積した層位と推測するが、人骨は井戸下位の底面付近から出土している。

(4) 人骨の出土状態

井戸下位(図5-10層)の底面から頭骸骨が出土した。出土した位置は、井戸下位の北壁に近い位置で、頭部上面を下に逆さ状態で出土し、井戸底からやや浮いていた。顎骨は破損しており原形を留めていなかったが、他に頸部から胸部にあたる脊椎、肋骨、腕骨などが依存していた。人骨は狭い井戸底から出土したため検出に難航し、また井戸から人骨が出土することに対しても予期しておらず、頸部から胸部の骨類が出土はじめた時点では獸骨と勘違いし、頭骸骨を発見した段階で骨類が人骨であることを判断した。ただ脊椎や肋骨、腕骨が井戸下位の北壁に接する頭骸骨の直上に集中していたこと、取り上げに際して脊椎の一部を連なりて拾い上げたことを記憶から指摘しておきたい。ところで人骨はいずれも井戸下位(図5-10層)から出土している。井戸の埋没が際立ち始めた井戸上位から中位(図5-5～8層)に、人骨片は含まれていない。よって木製品の加工場として貯蔵穴に利用していた段階に人骨が混入したとは思えない。むしろ井戸底から頭骸骨が出土しているなど、人骨類が井戸下位(図5-10層)に集中していた状態から推測して、水汲み場として機能していた段階に、あるいは水汲み場の役割が衰退した直後に混入したものと考える。また出土した骨は人体の上半部のみで、寛骨や大腿骨など下半部の骨類が出土していない。おそらくは人体が逆さ状態で井戸の内部に落ち込み、そのまま腐食した可能性が推測できる。ところで遺構が井戸であるため、井戸の底に人体を埋葬したとは判断

できない。どのような要因から井戸の内部に落ち込んでいたのか、人体の下半部がなぜ存在しないのか想像性に頼るしかない。

註記

金原正明・他、1994、「長寺遺跡における自然科学的分析」『天理市埋蔵文化財調査概報(平成5年度・国庫補助調査)』天理市教育委員会

第3章 出土遺物

(1) 土器について

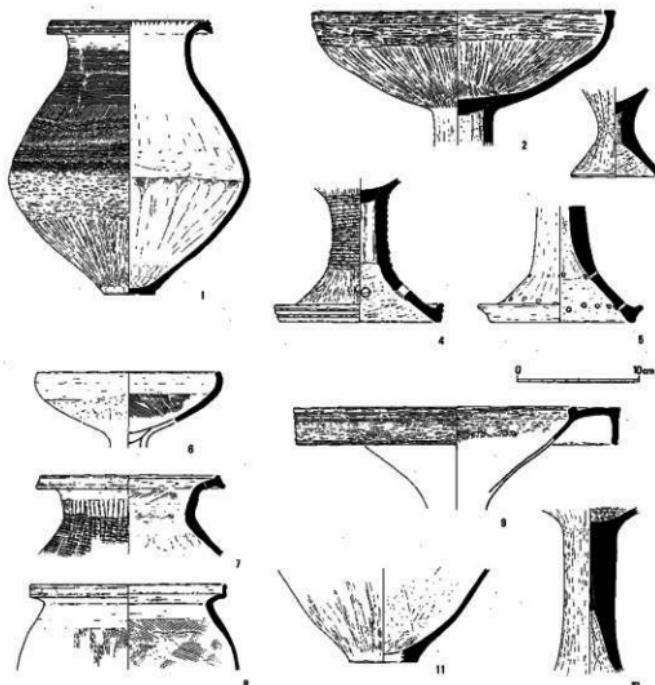


図7. SE-2・井戸遺構出土土器(S1/4)
1~5. 黒灰色粘土(5層)出土 6~8~9~11. 黒灰色粘土(6層)出土 7. 黒灰色粘土(6層)出土

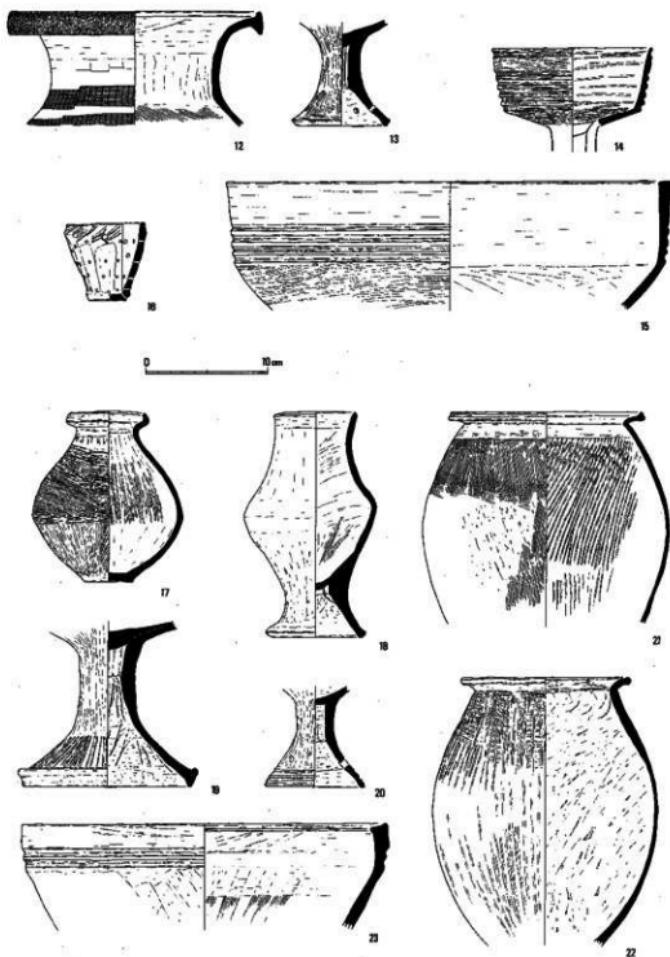


图8. SE-2・井戸遺構出土土器(S1/4)
 12・13. 黒灰色粘土(7層)出土 14・15・23. 黒灰色粘土(7層下位)出土
 16. 喰茶色灰色砂層出土 17～22. 喰茶色植物質粘土(8層)出土

井戸遺構（S E - 2）から出土した土器類はおよそ4・5箱程度で、井戸の大きさに比べて土器破片の出土量は少ない。おそらくは井戸を検出した地点が谷筋にともなう地形の落ち込み内にあり、住居とはやや隔てた所に所在していたためとも推測する。報告では出土した土器の内、種類や形態の判別、さらには実測が可能な口縁部の破片を中心に図面の作成をおこない、井戸遺構の時期的な判断やその目安を目的とした。

a) 5層出土の土器（井戸上位）

井戸遺構の上位にあたる黒灰色粘土から出土した土器で、破片数は同層位から出土したものが多い。井戸の機能が衰退していく過程で木製品の加工場となり木材や末製品の貯蔵穴にも転用されている。5層はさらに埋没が進行し、井戸の開口部が浅い土坑状の落ち込みになった段階で、土器類は廃棄されたものである。No1は口径13.8cm、器高22.8cmのやや小型の広口壺で、胴部上半に貧弱な櫛描直線文や波状文を施文している。この広口壺は文様の下地調整にナナメハケの痕跡が残っている。胴部下半から底部にかけてミガキ調整で仕上げる。ミガキは櫛描文の施文後に施し、タテヘラミガキの後から胴部中位にかけてヨコヘラミガキで仕上げる。櫛描文が貧弱であることから大和第IV様式と思われる。No4・5の高环脚部は脚部口径12~13cm、脚部の内面に範ケズリ手法を加え裾部に穿孔をする。柱状部に範描状の凹線文を多条に施文し、大和第IV様式の特徴が指摘できる。No3は脚部口径が7.6cmの小型高环で脚部の内外面ともケズリ手法をしあげる。No2は口径25.4cm、直口状に立ち上がる口縁部の高环部である。环部の内外面ともミガキで仕上げる。

b) 6~7層出土の土器（井戸中位・上半）

井戸遺構の中位上半にあたる黒灰色粘土から出土した土器で、数は少ないが比較的大きい破片が目立つ。井戸遺構が木器の末製品や木材などの貯蔵穴に利用されていた段階に堆積した層位で、6・7・7層下位の三層に区別できる。いずれも木材と混入しながら出土したものが多い。No6は口径15cmの小型高环の环部で、ハケ調整の後、口縁部をヨコナデで仕上げ、ケズリを外面に加える。No7は口径15.6cmのタタキを明瞭に残す無文の壺で、タタキの後、外面に粗いタテハケを施す。煤が目立ち煮沸に用いている。No8は口径16.5cmの壺で、口縁端部を受口状に幅広く跳ね上げ大和第IV様式と思われる。No9は口径19.8cm、外縁部口径27cmのいわゆる水平縁高环の口縁部である。No10は高环脚部で縦長の柱状部であるが、上半部は粘土を詰めた中実状、下半部は内面をケズリ仕上げしている。No12は口径21.4cmの広口壺で口縁端部に櫛描波状文、胴部に簾状文を施文し、大和第III-3・4様式の特徴がうかがえる。No13は脚部口径8cmの小型高环で、外面をミガキ、裾部内面をケズリで仕上げ、穿孔をもつ。No14は口径13cmの脚部をもつ鉢で、外面に5条の凹線文を施文しヘラミガキで仕上げている。No15は口径37cmの大型鉢で内外面ともヨコナデ仕上げし4条の凹線文を加え、下半部の外面をミガキ仕上げしている。

c) 8層出土の土器（井戸中位・下位）

井戸遺構の中位下部にあたる暗茶色植物質粘土から出土した土器で、植物質を含む粘土層が堆積していることから、水汲み場の機能が衰退し、井戸の内部に腐食土が形成され始めた段階の層位である。N°19の高環脚部とN°23の大型鉢以外、N°17・18・20・21・22は中位と下位の境目にある足場板（図5-m n）の直上からまとめて出土した一括土器である。N°17は口径6.2cm、器高14.3cm口縁部を受口状に成形した小型壺で、胴部外面に煤が付着している。N°18は口径6.8cm、器高19cmの脚部をもつ小型の直口壺で、胴部下部に穿孔がある。完形品で出土したのはこの2点で、他の一括土器はいずれも破片である。N°21は口径16cmの張りのある胸部をもつ壺で、口縁端部を跳ね上げ、口縁部から頸部にかけてヨコナデでシャープ成形し、一条の凹線文を施文している。N°22の壺は口径14.4cm、胸部上半にタタキの痕跡があり、内面は全体をケズリで仕上げている。N°19の高環脚部は裾部に穿孔がなく、内面をケズリ仕上げする大和第III-4様式の特徴を示す。N°23は口径30.4cmの大型鉢で、口縁部をヨコナデで仕上げ2条の凹線文を施文している外面下半部をケズリ仕上げしている。

d) 暗茶灰色砂層の土器

井戸遺構の中位下部にあたる南壁に近い側面からN°16の穿孔を多数にもつ口径6.4cm、器高6.4cm、小型鉢が出土している。ものは完形品で、外面にタタキの痕跡と内面には灰が付着している。近畿地方では同様な穿孔をうがつ小型鉢の類例が中期後半にみられるが、長寺遺跡では1次調査でも同じ土器が出土している。

e) 10層出土の土器（井戸下位）

井戸遺構の下位にあたる暗灰色粘土の井戸底付近からN°24の壺1点が出土し、人骨に接近していた。層位的には井戸が機能していた段階にある。口径13.4cm、器高18cmの壺で薄い器壁で仕上げた東海系の土器である。胸部の張りが強く、底部には高台を貼り付けている。外面を粗いタテハケ、胸部上半部にハケ工具で櫛状の文様を施文した伊勢湾西岸地域に見られる壺で、搬入品と思われる。

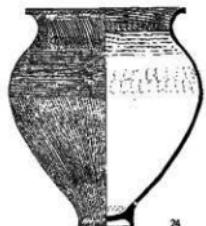


図9. SE-2・井戸遺構出土土器(S 1/4)
24. 暗灰色粘土(10層)出土

(2) 木製品について

a) 一木鋤（図10-1）

身と柄とを一本から作りだした一木鋤の完形品である。柄と身が175°の鈍角をなす屈折鋤で、全体的に荒い加工痕が明瞭に残り、身部の刃縁も厚く、刃先が原材料から必要な長さに削り出したままであることから未製品と思われる。

柄部は長方形の把手部と、断面が五～六角形をなす柄部からなる。把手部は縦幅が10cmとやや広いが、中央に孔をあけると細くなりすぎるため、このまま細く削っていき、「T」

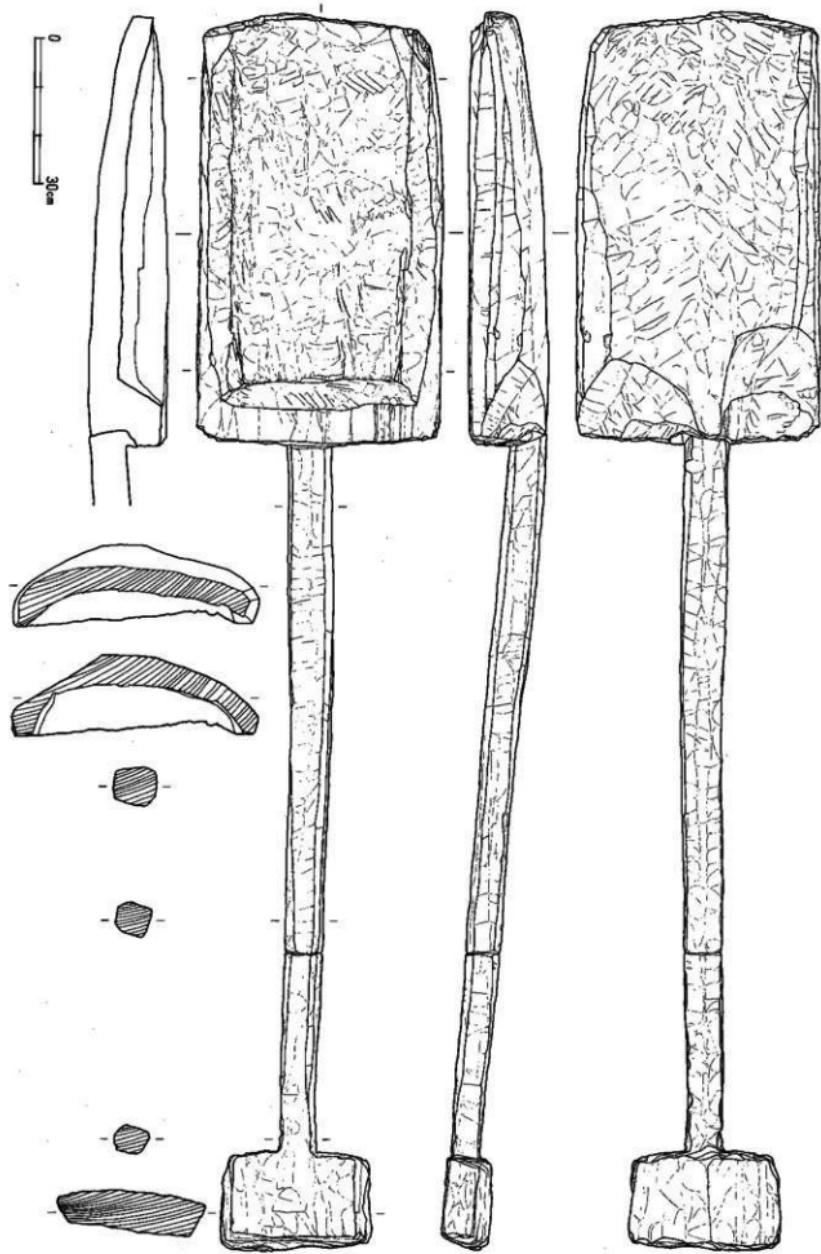
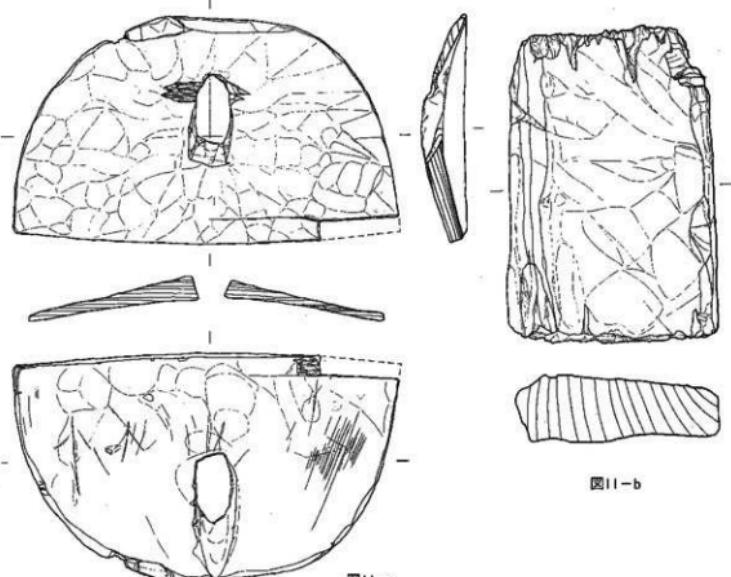
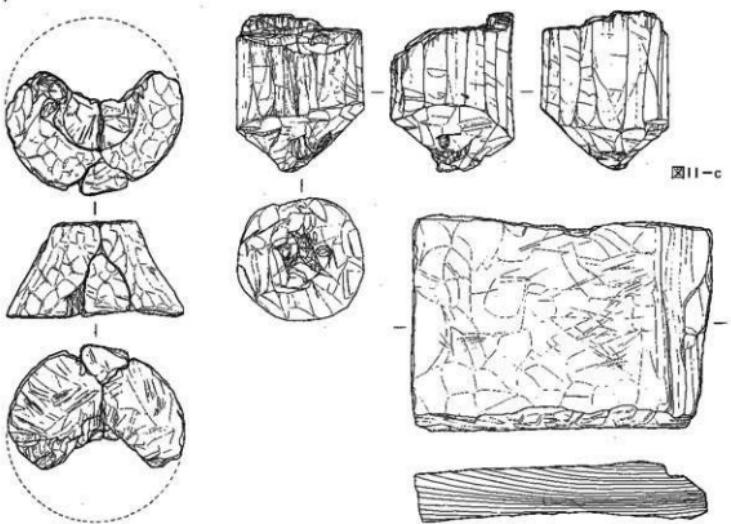


図10. SE-2・井戸遺構出土の木製鋤 (S 1/5)



図II-a



図II-c

図II-e

図II. SE-2・井戸遺構出土の木製品 (S 1/4)

字状に作り出すと思われる。柄部は身部との接合点から把手部に向かって徐々に細くなる。断面は三ヵ所でそれぞれ形状が異なるがこれは製作途中のためであり、製作の工程としてはまず断面を四角形に作り出し、次に四つの角を落としていき、最終的には多角形あるいは円形に作り出すものと思われる。全体的に身部に対して約8°左にひねっているが、本来は水平だったものが土圧などの影響で現在の様になったのだろう。

身部は肩部が柄の左右から直角に屈曲して水平にのび、再び直角に屈曲して刃縁に至る。肩幅が刃部最大幅と大差なく、そのため平面形はほぼ長方形をなす。柄基部から肩部までの距離は左肩が9.2cm、右肩が11.2cmと右肩が2cm広く作られている。これは製作途中の誤差であり、この後、仕上げていくにしたがいこの誤差は少なくなっていくものと思われるが、あるいは何らかの理由で右肩を広く作り出したのかもしれない。横断面は後面の左右両脇が立ち上がり、また縦断面においては前面が後面の方向に緩やかに屈曲し、そのため身の深さは肩部付近が最も深く、刃部先端になるにつれ徐々に浅くなる。柄部の接合点が身部の前面の片寄った箇所に取り付くことと考え合わせると、その主な機能が「掘る」ことよりも「すくう」ことにあったと推測される。全長126.4cm、柄長(直線)82.1cm、把手幅16.1cm、柄径3.6~4.4cm、刃部長44.3cm、身幅25.1cm、身厚2.3~3.1cmをはかる。柾目材。

b) 泥除(図11-a・8層出土)

身の平面形はほぼ半円形であり、右側下方と右側上端面の一部を欠損するがほぼ完形品である。上端面は直線的で、前面から後面に向って斜めに面取りが成されている。これは鍼と組み合わせる際、鍼の突起部に当て鍼身と泥除をずれにくしたものと思われる。断面は周囲から中央やや上に向かって湾曲しながら膨み、柄孔は膨んだ最高点に前面から後面に向って約35°の鋭角に穿たれている。柄孔の形状は前面の下方は直線的で平坦面をなし、上方は梢円形をなしている。後面は全体として歪な長楕円形をなし、特に上方は後面の上端面付近までのび、断面が丸形の柄の形状に合わせて丸く作られている。身部上端面は丸く作り出されているのに対し、下端面は平坦面をなす。全長18.8cm、身幅31.7cm、前面の柄孔長7.7cm、同幅3.4cm、後面の柄孔長10.2cm、同幅3.3cmをはかる。板目材。

c) 椭形木製品(図11-b・8層出土)

未製品。全面的に加工痕が明瞭で、全体の約三分の一を欠く。底部はほぼ平坦で、体部はわずかに外湾しながら斜め上方にのび、口縁部付近で内湾する。上面は中央がやや凹む。高さ7.8cm、底部径6.7cm、口縁部径14.4cmをはかる。芯持材。8層出土。

d) 用途不明品(図11-c・d・e・図12)

cは全体的に加工痕が明瞭に残り、未製品と思われる。円筒形で、上面は前方が斜めに作り出され、後方は突起部がある。下面は中央に向って尖らしている。上面から下面まで貫通する径1.2cmの円形孔と、歪な長方形孔がある。全長12.9cm、径10.4cmをはかる。芯持材。7層出土。

b・eはなんらかの原材料であると思われる。両方とも平面は長方形で、全体的に加工痕が明瞭に残る。eは縦幅17.8cm、横幅24.7cm、厚さ4.5cmをはかる。8・10層出土。

bは縦幅26.1cm、横幅17.4cm、厚さ5.2cmをはかる。7層下位出土。両方とも柾目材。

図12は円柱状をなす木製品である。上半部約五分の二は前面は平坦に、後面は断面山形に加工されており、残り約五分の三の下半部は断面が歪な楕円形をなす。上半部前面を除く全面が炭化している。上端部は加工しているが、下端部は加工されていない。全長102.2cm、幅9.5cm、厚6.7cm、前面平坦面長42.1cm、同幅8.9cm、後面平坦面長36.9cm、同幅8.4cmをはかる。柾目材。8層出土の足場板（図5・6-m）。建築部材の転用品とも考えられる。

e) その他

6層から7層下位にかけて、多数の自然木や加工木片が出土しているが炭化していない。また実測品を含め樹木の樹種鑑定は、別途報告で実施してゆきたい。

ところで、井戸下位にかけて長さ1.2～1.3m、幅8cm、厚さ3cmの長板が、東側壁面に接して井戸底から8層にわたって直立状態で2本出土している（図5-O・P）。壁面に沿う形で直立しながら出土しているため、8～10層から出土している木製品とは出土状態に異なり感じる。6～7層下位にかけて壁面に接しながら出土している板材との関わりが推測される。

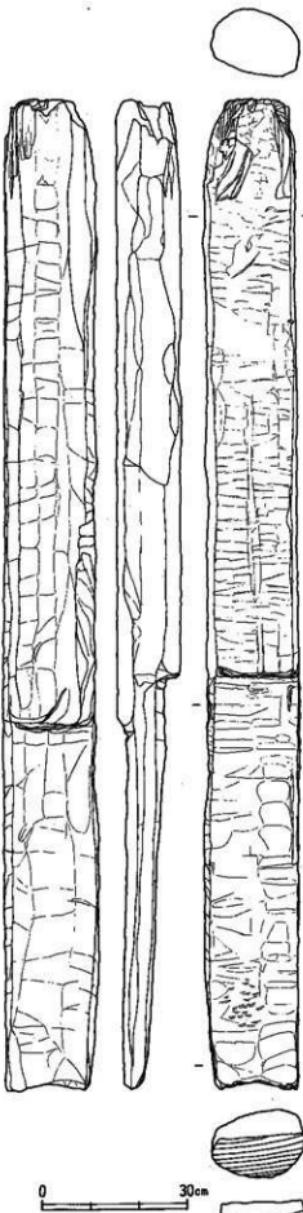


図12. SE-2・井戸遺構出土の木製品 (SI/5)

天理市長寺遺跡で出土した人骨、弥生人の遺骨か？

片山一道

京都大学大学院理学研究科

〈はじめに〉

長寺遺跡の第10次調査で、井戸遺構（S E - 2）の底面にあたる深さ3.5メートルの下層の粘土中から人骨の遺残が発掘された。これら人骨は出土状況の詳細は不明だが、頭蓋骨が頭蓋冠を下向けた逆さまの状態で最下位にあり、その上に椎骨や肋骨や上腕骨などの骨が乗り、椎骨など的一部は連結状態で発見されたという。なお人骨の出土状況については、本報告書の第2章を参照されたい。

これら人骨に接近して一個の土器（甕）が発見された。伊勢湾西岸地域でよく見られる弥生時代中期（？）の甕らしいが、人骨との共伴関係は不明である。これら人骨は、出土状況からは甕と何ら関係なく、逆さま状態で井戸に落ち込んだ者の遺骨である可能性が高いという。つまり甕に収められていた遺骨ではないようだ。

出土人骨は取り上げられたのち、相当期間、発掘現場事務所で一応の保存処理を施された。そして筆者の研究室に移送され、1年以上にわたって綿密な形態学的な検査が行われた。本稿は、その検査結果を詳細に報告するものである。そして、どんな身体特徴をした者の遺骨であるか推測するとともに、なぜ井戸の底に人骨が存在していたか、などの点について推量するものである。あわせて人骨についての炭素14年代の測定の結果も報告する。

井戸遺構の底から見つかり、しかも埋葬されたとは言えないような状態で出土した人骨である。だから出土状況だけから、どの時代の死者の遺骨か決定するのは難しい。同じ位置で出土した甕の形式による編年から弥生時代の人骨らしいと推測できるものの、そう断定するのは性急すぎる。人骨と甕が別々の時代に放りこまれた可能性もすてきれないからである。そこで人骨そのものの年代測定が必要となる。そんな理由で、名古屋大学年代測定資料センターにC14年代の測定を依頼した次第である。その結果も併せて報告する。なお年代測定の詳細な結果については附表を参照されたい。

もし弥生時代のものなら、この出土人骨はきわめて優れた学術的な価値をもつと言えよう。これまでに近畿地方、特に奈良、大阪、京都などの畿内で弥生時代の古人骨が発掘された例は、なぜだか非常に少ない。そのために弥生時代の畿内に、どんな人びとがいたのか、ほとんど解明されていないからである。畿内の弥生人の身体特徴を探ることは、考古学や人類学の重要な課題として残してきた。

これまでに頭顔部の特徴がわかり、顔立ちを推測できるほどの保存状態で発掘された畿

内の弥生人骨は、せいぜい2、3例しかない。ひとつは大阪国府遺跡の弥生時代中期の遺骨で、成人の男性が2体と女性が1体発見されている。この人骨については、土井ヶ浜の弥生人と津雲遺跡の縄文人の間の中間的な頭顔部の特徴をもつことが報告されている（池田、1988）。もう一つは、奈良県唐古・鍵遺跡で出土した弥生時代の前期末から中期初頭の弥生人骨である。これは北九州の弥生人に似た特徴が報告されている（Baba et al., 1990）。このような現況からも、本人骨から得られる情報は非常に貴重な意味をもつのである。

〈人骨の遺存状態〉

いざれの残存骨も保存状態は概ね悪い。頭骨については、頭蓋骨は完形に近いが、下頸骨はいくつかの断片しか残っていない。いくつかの頸椎と胸椎、左右の肩甲骨は比較的保存が良い。しかし鎖骨や上腕骨、前腕骨や手骨、肋骨などは小さな断片が残存するだけである（写真1、2、3、4、5）。

どの骨も黒光りする濃褐色を呈する。また、ところどころが茶色を帯びたり、白く粉をふいたような状態となっている。褐色を呈するのは、水に溶けた鉄分などを強く吸着してきたためである。まだ水に浸かっていた頃か、粘土中で吸着してきたのであろう。黒くテカテカするのは、発掘後、保存処理のためにパラロイドB-72のアセトン溶液を塗布したためである。茶褐色となったり白い粉をふいたようになっているのは、骨の表面が剥がれたり、発掘後、乾燥させる過程で裂けたりした部分である。あるいはパラロイドB-72の溶液が塗布されていない部分である。

本例のように水没していた骨は非常に脆弱な状態で出土する。そして乾燥後、骨の表面の緻密質が反り返って、どんどん剝がれしていく。それを防ぐため、パラロイドを塗布する処理はしかたない。おそらく、このような出土人骨の場合には、それが最善の策だろう。パラフィンや他の強化剤とちがって、骨らしさを比較的よくとどめたまま保存できるのである。

そうした保存処理のおかげで各骨の骨質は堅牢である。計測検査にもよく耐える状態となっている。しかし表面が剥がれたり、骨の表面が裂開した部分は、乾燥後、ひどく反り返ったりしていて、詳細な形態観察は不可能であった。

〈保存骨と個体数推定〉

出土した人骨遺残について、残っている骨の種類と身体の部位を示すのが図1である。黒く塗りつぶした部分が残存する骨である。

下頸骨を含む頭骨、何本かの歯、椎骨や肋骨や胸骨などの胸骨、左右の上肢骨が遺存する。しかし奇妙なことに、腰の部分に当たる腰椎や骨盤、そして下肢骨はまるで存在しない。下肢骨については、右大腿骨の下端部の破片らしきものが一つあるが、非常に強く損耗しているために、そもそも人骨なのか、はたして本当に大腿骨の破片なのか、頭骨など

の他の骨と同一個体のものなのか、実はさだかではない。光沢とか保存状態などから、たとえ人骨であっても、別個体のものである可能性が高い。

その問題の大腿骨の破片を含む何個かの微小片をのぞいて、すべての遺残骨は、どの骨のどの部位に属するか、うまく固定できた。その結果、ぜんぜん重複する骨がないことが判明した。したがって、ただ1個体分の骨格だけが存在すると考えてよい。個々の骨の大きさと形を見較べることによっても、このことは確認できる。したがって部位が特定できる骨はすべて、ただ一人の遺体のものであることは間違いない。

以下、頭蓋骨から順番に、残っている骨の遺存状態を記載する。

頭蓋骨：もっとも保存が良い。右側頭骨の鱗部と錐体部、および右頬骨弓が壊れ、右の頬骨と上顎骨の一部を破損し、後頭鱗や頭頂部、および眉間の部分で外板が部分的に裂開するが、他の部分はほぼ完形をとどめている。

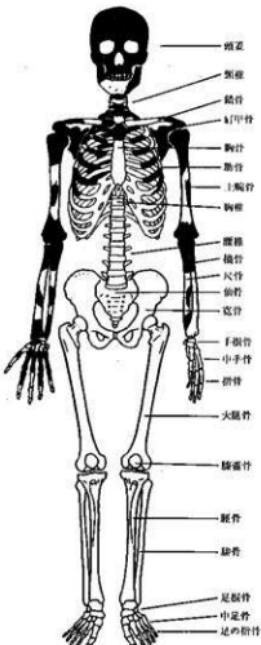


図13 長寺遺跡で出土した人骨の身体の部位
(黒く塗りつぶした部分)

下顎骨：3個の断片が遺存する。うち1個は左下顎枝と周囲の骨体の断片で、最後の大臼歯（第三大臼歯か第二大臼歯かは不明）の歯槽の一部までを含む。筋突起は破損するが、下顎角と下顎頭は完形をとどめている。1個は右の下顎枝と骨体後部の断片で、外側板は完全に瓦解して残っていない。最後位の2個分ほどの歯槽は完全に閉鎖している。もう1個は、それに続く右側骨体の断片で、2個の小白歯が釘植し、犬歯の歯槽は開放しているが、第一大臼歯の歯槽は完全に閉鎖している。したがって、右下顎の大臼歯はすべて、すでに生前に脱落していたのは間違いない。

舌骨：完全に癒合した左右の大角と骨体が存在する。小角はないが、どこにも壊れた痕跡がないので完形と考えてよいだろう。

胸骨：胸骨柄だけが、ほぼ完形で残る。

椎骨：第五番目の頸椎をのぞく全ての頸椎がある。しかし環椎と第六頸椎は大きく破損している。上位の8個の胸椎が残る。第八胸椎以外、残存する胸椎はみな、ほぼ完形をとどめた状態である。下位の4個の胸椎と、すべての腰椎は影も形もない。

肋骨：左右側いずれも、下位の4個ばかりの仮肋は残っていないようである。これらは腐食、分解して消滅してしまったのだろうか。第一番目の肋骨だけが完形で、他はすべて、肋骨頭や頸部や肋骨体の破片に碎けているので、どの肋骨か、正確には同定できない。

肩甲骨：左右ともに完形に近いまま残っている。しかし左肩甲骨は肩峰と外側縁の一部が壊れ、右もいくつかの部分で骨表面が裂開して反り返っている。

鎖骨：左右の鎖骨の外側部、右の肋骨の内側部が、いずれも断片となって存在する。胸骨端、肩峰端とともに骨端が完全に癒合しているのが確認できる。

上腕骨：左右の上腕骨とともに、上端部と下端部の断片と、それに骨体のいくつかの剝離片が残存するだけである。

桡骨と尺骨：尺骨は左右ともに遠位と近位の両断片と骨体のいくつかの破片が残るが、桡骨は右腕は近位部、遠位部、骨体の断片が残るが、左腕は近位の断片しかない。相対的に右腕のほうが良く残る。

手骨：1個の手根骨、5個の中手骨、6個程度の指骨の断片が残存するが、ほとんどは右手のものようである。

最後に、歯の残存状態を歯式で示す。

右上顎					左上顎				
M	M	○	-	C	I	○	○	○	C
-	-	P	P	○	?	?	?	?	/ P M M
右下顎					左下顎				
?	?	?	?	?	?	?	?	?	?

○は歯槽開放（死後損失した歯）、-は歯槽閉鎖（生前に抜けた歯）、/は先天性欠如、?は不明な歯を示す。また文字で示したもののは、すべて釘植歯である。おそらく第三大臼歯は、十分な隙間が無いことから、上下左右の4本ともに先天性欠如であろう。

注目すべきは、第九胸椎より下の骨格が、腰の骨や下肢の骨を含めて、ごっそりと欠けていることである。また左上肢も前腕の下部から先の骨がまったく見あたらない。残存骨の状態から考えると、それらの骨が全部、腐食して消滅したと考えるのは、いかにも不自然である。後で述べるように、おそらく井戸に埋まった当初から、それらの骨はそもそも存在しなかったのだろう。

〈年代測定〉

先に述べたように、本人骨の出土状況を鑑み、また近畿地方では非常に貴重な弥生時代の人骨である可能性を考慮して、名古屋大学年代資料測定センターで人骨の年代測定を行った。

試料に供したのは肋骨の破片である。それから残留コラーゲンを抽出し、タンデトロン加速器を使ってコラーゲン中の炭素14の同位体比を測定して、C14年代測定値を求めた。おそらく長い間、ほとんど水没状態にあったためだろう、コラーゲンの収率はかなり良く、そのために信頼のおける年代値が推定できたとの報告である。

詳細な測定結果は附表に示すが、 2473 ± 63 年B Pという年代値が得られた。暦年代較正値は $762 - 622$ BC ($600 - 505$ BC) 438 - 426 BCとなることから、測定値が信頼できるなら、考古学で考えられている弥生時代の始まりよりも古く遡ることになる。

人骨のほうが甕よりも古く、人骨は縄文時代まで遡るのか、人骨と甕は同時代のもので、実際には弥生時代の始まりがもっと古くまで遡るのか、あるいは何らかの理由で、人骨のC14年代がより古く推定されたのかなど、いくつかの可能性が指摘できる。いずれが正しいのか、ここで結論することはできない。

〈性別〉

出土した1体分の人骨は、まず間違いなく女性の遺骨である。ほとんど断定してもよいだろう。骨盤を構成する骨は残っていないが、頭蓋骨や椎骨などは、それほど強く女性骨の特徴を示すのである。

その理由は、まず骨格全体が小柄で非常に華奢であることである。これについては、表の1と2を参照されたい。

頭蓋骨については、前頭結節が左右にはっきりと認められ、眼窓縁がきわめて明瞭で、特に眼窓上縁は非常に鋭角的である。眉間の膨らみはほとんどなく、眉のところが小さく出ているだけである。頬骨は非常に小さく、同時に非常に華奢で、前頭突起と頬骨弓とともに非常に弱々しく細い。外後頭隆起、側頭線、乳突上稜などの筋付着部の形成が弱く、頭蓋冠は全体に丸みを帯びている。乳様突起は左右で大きさが異なる。右のものは中等度の大きさで膨隆するが、左のものは小さく、先が尖った尖頭形をしており、しかも先が強く内側を向いている。頑丈さの点でも左右の乳様突起は顕著な非対称を示す。なぜ左右でこんなに違うのか、非常に興味をそそるが、おそらく胸鎖乳突筋の発達が非対称で、右のほうが強く発達していたのであろう。ちなみに下顎骨の下顎頭も小振りで華奢である。

頭蓋骨以外の残存骨についても、とにかく骨組みが華奢で、やたらと女性らしさが目立つ。いくつかの重要な点だけを列記しておこう。鎖骨、上腕骨、桡骨、尺骨とともに、骨端部が非常に小さい。胸骨柄は大きめであるが、非常に薄く平坦である。肩甲骨は肩峰が細く、関節窩が小づくりである。椎骨は頸椎から胸椎まで、一様に椎骨体が小さく椎骨弓が弱々しい。肋骨も手骨も細く華奢である。

以上で挙げた特徴はすべて女性骨の特徴で、男性骨で見られる特徴はまったく認められない。典型的な女性骨と言ってよいだろう。

〈死亡年齢の推定〉

性別を判定するには、まったく苦労しない遺骨だが、死亡年齢を推定するのは、それほど容易ではない。

後頭骨蝶形骨軟骨結合が完全に骨化していること、および鎖骨の胸骨端が完全に癒合していること、舌骨の大角と舌骨体が完全に癒合していることなどから、成年の骨であるのは間違いない。また各椎骨の骨体の上下の関節面に軸突堤の骨増殖が認められないこと、そして同じく椎骨の上関節面と下関節面、さらには肩甲骨の関節窩、上腕骨や桡骨や尺骨の関節面などの辺縁に骨棘形成がほとんど認められることから、まだ老年の域には達していないかかったものと推測できる。したがって死亡時の年齢は、若くとも20歳前後、齡とっていたとしても60を超えない年齢、つまり壮年から熟年にあつたに違いない。

もう少し年齢幅を絞るために、歯の咬耗の程度、頭蓋骨の各縫合の癒合の程度、各骨の各関節面の辺縁部の骨棘形成の程度、いくつかの骨の骨密度などを、できるだけ詳細に肉眼および検鏡検査した。

まず、歯の咬耗状態である。残存歯の咬耗は、上顎の左歯列については、大臼歯と小白歯ではエナメル質がのぞく程度（マルテンの2度）で中等度から軽度である。そして犬歯ではやや強い。右歯列については、犬歯は左と変わらないが、大臼歯では弱い。ことに最奥の第二大臼歯は咬耗らしきものが認められない。右歯列の大臼歯で咬耗が弱いのは、下顎骨片からわかるように、相対する下顎の大臼歯が生前に脱落して咀嚼機能を果していかなかつたためだろう。したがって右大臼歯は年齢推定の参考にはならない。

一般に歯の咬耗は縄文人では非常に速く進行するが、現代人では遅い。また、すでに穀食生活に移行していた北九州弥生人や近畿地方の古墳人では、歯の咬耗速度は現代人に似るが、それよりやや遅い。現代日本人の場合だと、本個体でみられる程度の咬耗状態になるには、使用年数が第一大臼歯では20-50年、第二大臼歯では25年から40年程度と考えてよいだろう。現代人よりも咬耗の進行が早かったと仮定すると、本個体の場合、使用年数は第一大臼歯が10-40年程度、第二大臼歯が15-30年程度だったのではなかろうか。すると、第一大臼歯と第二大臼歯は、それぞれ6歳と12歳の頃に萌出するから、本個体の死亡年齢は大略25-45歳あたりだったろうという推測が可能である。

次に頭蓋骨の縫合の癒合状態を見る。頭蓋冠の内板では、冠状縫合は全体の半分程度、矢状縫合は三分の2程度、そして人字縫合は三分の1程度が癒合しているようである。また外板では、冠状縫合と人字縫合はほとんど癒合せず、矢状縫合のみ四分の1ほど癒合している。このような癒合状態からは40歳以上の者の頭蓋骨とは考えにくい。その他の頭蓋の縫合は、いずれについても癒合している様子はない。口蓋の縫合は、切歯縫合の外側の半分ほどが癒合している程度で壮年者で普通にみられる状態である。

先に述べたように残存骨については、各関節面の辺縁の骨棘形成はほとんど認められないと軽微である。検鏡検査によっても特記すべき徵候は認められない。肩甲骨の肩峰にも

骨増殖はまったくない。第一肋骨の胸骨端の骨化延長もきわめて弱い。これらのことから、まだ40歳に達しない年齢の者の骨格と判定してよいだろう。各骨の骨量も非常に豊かである。そして、いずれの骨にも多孔状になって骨密度を減じたような部分は皆無である。これも壮年者の骨格であることの傍証となろう。

なぜ脱落したか不明だが、上顎の右第一小白歯、下顎の右の第一および第二大白歯は生前に脱落していたことが確かである。しかも相対歯の咬耗状態を鑑みると、この両大臼歯は死亡に先だつ相当以前に抜けた可能性が高い。また、鎖骨の胸骨端の骨端線が完全に消失していることと、舌骨の大角と舌骨体が完全に癒合していることは、およそ30歳になる前に死亡した人物の遺骨である可能性を示唆する。

以上の検査結果を総合すると、この人骨の主の死亡年齢は、壮年の後半、すなわち30—40歳あたりと推定するのが妥当であろう。

〈身体特徴〉

脳頭蓋の計測値を表1、顔面頭蓋の計測値を表2、頭骨の形態小変異の出現の有無を表3、椎骨と胸骨の計測値を表4、上肢骨の計測値を表5に示す。

これまでに出土した近畿地方、特に奈良、大阪、京都などの畿内地方で出土した弥生時代の人骨は非常に少ない。土壤基による埋葬が中心だったため、遺骨が土中で腐食、分解して、まったく残っていないか、惨憺たる状態でしか残っていないのである。このため頭顎部の特徴がよく分かる近畿地方の弥生人骨は極めて少ない。せいぜい大阪国府遺跡から発掘された成人の男性2体と女性1体、奈良唐古・鏡遺跡の成人男性の1体くらいのものである（池田、1988）。このために十分な比較検討はできない。国府遺跡の弥生人骨および西日本の弥生人骨（内藤、1981）と簡単な比較をすること、さらには計測検査と肉眼観察によって明らかとなった身体特徴のうち、特記すべきものを記してみたい。

ことに上肢骨の計測値でわかるように、どちらかというと骨細の身体をした華奢な体格の女性だったようである。女性であることを考慮しても、全体に骨組みが細く、概ね筋付着部の発達が悪い。残念ながら四肢の長骨の最大長が計測できないので、正確な身長を推定することはできない。表4で示す各椎骨の椎体の高径、特に各胸椎の前高と後高の計測値に関しては、近代日本人女性の平均値（岡本、1930、数値は割愛する）より各々1ミリばかり大きいことから、さほど身長は低くなかった可能性が大である。ひょっとしたら155センチ前後、少なくとも150センチくらいはあったのではないかろうか。土井ヶ浜弥生人女性の平均身長は150.0センチ、金隈弥生人のそれは151.7センチと推定されているから、弥生人の平均近くか、それ以上の身長であった可能性がある。

脳頭蓋については、近畿地方現代人女性の平均値（現代人頭蓋骨研究班、1981）と比べて、最大長と最大幅は変わらないが、バジオン・ブレグマ高は小さい。土井ヶ浜弥生人女性の平均値（内藤、1981）と比べるとバジオン・ブレグマ高が大きく、大阪国府遺跡の弥

表1 頭蓋の計測値と示数

計測値		
1	頭蓋最大長	176
5	頭蓋基底長	95
7	大後頭孔長	36
8	頭蓋最大幅	(140)
9	最小前頭幅	92
10	最大前頭幅	105
12	最大後頭幅	106
13	基底幅	100
14	最小頭蓋幅	71
16	大後頭孔幅	32
17	バジョン・ブレグマ高	132
26	正中矢状前頭弧長	115
27	正中矢状頭頂弧長	111
28	正中矢状後頭弧長	94
29	正中矢状前頭弦長	133
30	正中矢状頭頂弦長	123
示数		
8 / 1	頭蓋長幅示数	(79.5)
17 / 1	頭蓋長高示数	75.0
17 / 8	頭蓋幅高示数	(94.3)
16 / 7	大後頭孔示数	88.9
9 / 10	横前頭示数	87.6
9 / 8	横前頭頭頂示数	(65.7)
27 / 26	矢状前頭頭頂示数	96.5
29 / 26	矢状前頭示数	115.7
30 / 27	矢状頭頂示数	110.8

注) 計測値および示数の前の数字はマルチンの番号

表2 顔面頭蓋の計測値と示数

計測値		
41	側頸長 (L)	74
42	下頷長	92
43	上頷幅	104
44	両眼窩幅	99
45	頬骨弓幅	(128)
46	中頷幅	96
48	上頷高	67
50	前眼窩間幅	17
50A	鼻根横弧長	20
51	眼窩幅 L	43
	R	44
52	眼窩高 L	37
	R	36
54	鼻幅	27
55	鼻高	51.5
57	鼻骨最小幅	5
57(1)	鼻骨最大幅	17
60	上頷歯槽長	50
61	上頷歯槽幅	62
62	口蓋長	44
63	口蓋幅	38
示数		
48 / 45	上顎示数 (K)	(52.3)
48 / 46	上顎示数 (V)	69.8
52 / 51	眼窩示数 L	86.0
	R	81.8
50 / 50A	鼻根湾曲示数	85.0
50 / 44	前眼窩間示数	17.1
54 / 55	鼻示数	52.4
61 / 60	上頷歯槽示数	124.0
63 / 62	口蓋示数	86.4
45 / 8	横頭顎示数	(91.4)
9 / 43	前頭両眼窓示数	88.5
9 / 45	頬前頭示数	(71.9)
57 / 57(1)	横鼻骨示数	29.4

注) 計測値および示数の前につけた数字はマルチンの番号

表3 長寺弥生人骨の頭蓋形態小変異

観察項目 (status)	出現状況		
	R	M	L
1 ラムダ骨	—		
2 インカ骨	—		
3 ラムダ縫合骨	+ ?	+	
4 後頭縫合残存 (10mm≤)	- ?	- ?	
5 瞬管 (Patent)	+	+	
6 舌下神経管 (二分)	—	—	
8 後頭頸前結節	—	—	
9 後頭頸 (二分)	—	—	
10 咽頭窓	—		
11 後頭頸前小面	—	—	
12 傍顎突起	—	—	
13 アステリオン骨	—	—	
14 乳突孔 (exsutural)	+	—	
15 O-M縫合骨	—	—	
16 韭孔 (open)	—	—	
17 卵円孔 (incomplete)	—	—	
18 翼鉗孔	—	—	
19 ヴェサリウス孔	+	+	
21 頭頂切痕 (absent)	—	—	
22 頭頂切痕骨	—	—	
23 頭頂孔	+	+	
24 鰐状縫合骨	—	— ?	
25 プテリオニ骨	—	—	
26 F-T接合	—	—	
27 前頭縫合	—		
28 鼻骨上縫合 (5mm≤)	—		
29 ブレグマ骨	— ?		
30 冠状縫合骨	? +	+	
31 眼窩上孔	+	+	
32 眼窩下縫合	—	—	
33 眼窩上神経溝 (10mm≤)	—	—	
34 副眼窩下孔	—	—	
35 内側口蓋管	—	—	
36 上顎隆起	—	—	
37 口蓋隆起 (10mm≤)	—		
38 切歯縫合	+	+	
39 横頸骨縫合痕跡 (5mm≤)	—	?	
40 頬骨顎面孔 (なし)	—	—	
S 外耳洞骨膜	—	—	

表5 上肢骨の計測値(mm単位、計測可能な項目のみ)

鎖骨	L	R
最大外端幅	/	20
最大内端幅	/	20
肩甲骨		
形態学幅	(131)	131
形態学長	93	93
肩甲骨骨長	98	96
腋窩線長	115	115
棘下窓形態幅	106	105
棘上窓形態幅	/	40
肩甲棘投影長	/	122
肩峰最大幅	23	23
肩峰長	34	38
鳥口突起最大長	38	36
関節窓長	32	33
関節窓幅	21	21
上腕骨		
上端幅	41	42
下端幅	50	(54)
頭最大横径	35	36
頭最大矢状径	38	37
滑車幅	18	19
小頭幅	16	15
尺骨		
尺骨頭幅	23	23
尺骨上横径	17	18
尺骨上前後径	22	22
最大下端幅	/	18
橈骨		
小頭粗面距離	25	24
小頭横径	20	19
下端幅	/	28

表4 椎骨および胸骨の計測値 (mm単位、計測可能な項目のみ)

椎骨	椎体前高	椎体後高	椎体上面横径	椎体上面矢状径
頸椎III	13	13	20	13
頸椎IV	13	13	20	13
頸椎VII	14	15	25	15
胸椎I	16	16	26	15
胸椎II	17	17	27	14
胸椎III	17	16	23	14
胸椎IV	17	17	23	16
胸椎V	17	18	24	18
胸椎VI	17	18	24	21
胸椎VII	18	17	26	23
胸椎VIII	/	19	27	/
胸骨				
胸骨柄	最大幅: 49		胸骨柄高: 45	

生人女性の値（池田、1988）と比べると最大幅が大きく、そして津雲縄文人女性の平均値（池田、1988）と比べると最大幅の大きいことが、本女性人骨の特徴である。頭蓋冠の長幅示数は短頭よりの中頭型、長高示数は中頭よりの高頭型、そして幅高示数は中頭型である。また横前頭頭頂示数は狭前頭型、大後頭孔示数は広型を示す。脳頭蓋の特徴を総括すると、国府遺跡の弥生人骨と同様、縄文的な特徴が少くないようだ。

顔面頭蓋については、まったく脳頭蓋と異なる様相を呈する。頬骨弓幅や中顎幅などの幅径が小さく、上顎高や眼窩高や鼻高などの高径が大きい。つまり顎が少し長めで横幅が小さいのである。この点では、津雲の縄文人よりも土井ヶ浜の弥生人のほうに似ていると言えよう。また国府遺跡の弥生人女性とは趣を異にする。鼻骨の幅が小さく、ことに鼻骨上部が極端に狭い。いわゆるピンチ状の鼻骨である。この点でも、津雲縄文人とは全く違う顔だちを示す。コルマンの上顎示数は中上顎型、眼窩示数は左が高眼窩型で右が中眼窩型、鼻示数は広鼻型、上顎歯槽示数は短顎型を示す。縦じて顔面頭蓋は平坦で、鼻根部のへこみや眉部のつきだしが弱く、鼻も低く、のっぺらとした顔だちだったようである。これも津雲縄文人や国府弥生人より西中国の弥生人のほうに相似する特徴である。

前歯の咬合型は判定できない。しかし歯槽性の突顎がけっこう強いことから、もしかしたらハサミ状の咬合をしていたかもわからない。切歯は1本だけ釘植して残っているが、この壊れた右の上顎側切歯の舌側面には、非常によく発達したシャベル形成が認められる。計測値は省略するが、全体に歯のサイズが大きい。ことに犬歯や小白歯が大きいのが目立つ。犬歯は女性とは思えないほど大きい。

形態検査の結果をもとに、筆者が顔だちの特徴を口述し、それを参考にして画家の中村



図14. 長寺遺跡で出土した人骨の復顔図（中村仁氏描画）

仁氏が素描し、さらに何回かの修正を繰り返して完成させたのが、図2の復顔図である。土井ヶ浜や北部九州の弥生人に似た顔立ちであることが容易にイメージできるだろう。

〈その他の特記すべき特徴〉

利き腕を判定するのは難しい。左右の肩甲骨とともに肩関節面の後方への伸展が弱く、左右のどちらがより伸展しているか区別できないからである。

しかし上腕骨を調べると、右の上腕骨では、内側上頸、外側上頸とともに異常に骨増殖を起しているのに、左ではそれが見られない。想像をたくましくすれば、この遺骨の主は右利きで、前腕伸筋、前腕屈筋、円回内筋、さらには指伸筋などを常習的に酷使していたと考えられないでもない。これらの筋肉を駆使する労働といえば、まず臼をつくことなどが考えられる。上腕骨には左右ともに滑車上孔がある。右は大きいが、左の上腕骨では針の穴ほどの大きさでしかない。このことからも右の上腕骨のほうが左よりも頑丈であったことがわかる。

乳様突起の大きさと形状が左右の側頭骨で異なるのは、大いに興味をそそられる。右側で大きく左で小さいのだが、おそらく病変ではなく、胸鎖乳突筋の大きさの非対称性を反映するものだろう。ならば、右利きの利き顔であった可能性が指摘できる。

残念ながら抜歯の有無は分からぬ。すくなくとも上顎については、死亡時、全前歯が備わっていたことは確かである。

〈古病理学的所見〉

残存骨のいずれについても、死亡時の傷痕のようなものや、生前の病変のような痕跡は認められない。骨折痕も皆無である。そして、死後に与えられた器物による損傷や獣類による咬痕もまったく認められない。

虫歯もなく、とくに目立ったエナメル質減形成も認められない。健常者の骨格ではなかったと疑わせるような痕跡は、どこにも認められない。

しいて挙げれば、上下顎の歯槽がやせ、軽度の歯周症が指摘できる程度である。それと死亡のしばらく前に右の上顎第一小白歯が抜け落ち、まだ若い頃に右の下顎第一大臼歯と第二大臼歯を失っていたこと、さらに上顎の左右の中切歯の根尖に嚢胞が生じていたことなどである。正確なことはわからないが、小白歯の脱落は歯周症が原因であったこともあ

りうる。囊胞は頬側に開通しているが、病的な痛みを伴うほどのものであったかどうか、不明である。

〈なぜ井戸の底に存在したか〉

若くはないが老齢でもない一人の女性の遺骨が井戸の底で見つかったのは、まるでミステリーである。しかも、腰から下の骨格がまったく存在しないのも奇妙なことと言えよう。もはや永久に解明できない謎だろうが、大胆すぎるけど、そのあたりの事情をちょっとばかり憶測してみよう。

最初に言えるのは、まず埋葬された遺体とは考えにくいことである。その理由は、井戸の底から出土したこと、腰から下の骨格が存在しないことを挙げれば十分だろう。マヤ遺跡では泉の底に埋葬した例があるが、日本で井戸の中に埋葬する風習があったとは思えない。また晒骨となって埋葬したとしても、きちんと頭骨、胴骨、上肢骨の骨をセットで揃えて埋葬するとは思えない。

そもそも晒骨となって井戸に埋められたとも考えられない。なぜなら、出土状況の記録によれば、すくなくとも椎骨の一部は連結した状態で発見されているからである。椎骨など連結した状態で存在していたことは、井戸に埋められたときはまだ、軟部組織が骨を被ったままだったことを意味するからである。

それでは、まだ骨格が軟部組織で固定されていたときに、何らかの理由で下位の胸椎のところで胴部が切断されて、井戸の中に放り込まれたのであろうか。このほうが可能性が高い。ならば、残存する最下位の胸椎に切断時の創痕があってもよい。しかし実際には、その事実はない。最下位に当たる第八胸椎は少し傷んでいるが、創痕らしきものは認められない。現代の獵奇犯罪ならともかく、弥生時代の頃に人間の遺体を解体するようなことがあっただろか。

それよりも、まだ肉のついた遺体が犬などの獣類に食いちぎられ、上半身だけ残った。そして誰かがそれを見つけて、井戸に放り込んだという可能性のほうが高いように思うのだが。もしそうだとしても、遺残する骨に咬痕がまったくないのは不思議である。ともかく、何らかの異常な出来事によって井戸に埋められた死者の遺骨であることは間違いかろう。そして頭骨が最下にあり、その上に他の骨が乗っていたことから、頭を下にして放り込まれたことも確かだろか。

左の前腕の遠位部から先の骨が見つからない理由はさだかでない。井戸に埋められたとき、最初から無かったのか、ひどく腐食、分解した結果なのか、あるいは発掘の際の見逃しなのか。いずれの可能性も甲乙つけがたい。

最後に、肉がついた遺体を胴の中央部で解体することは極めて難しいこと、そして、この程度の保存状態なら、腰から下の骨格だけが選択的に腐食、分解して消え去ることは絶対にありえないことを付け加えておきたい。

〈まとめ〉

1. 弥生時代の初め頃の人骨である可能性は高い。
2. 長期間、水没していたであろう一人分の上半身の骨格があり、少量だが、獸骨か、多個体の人骨の微小片がまじっている。
3. 埋葬ではなく、何らかの特異的な出来事によって井戸の底に埋もれた人物の遺骨であろう。
4. 成人の女性の遺骨である。
5. 死亡年齢は壮年の後半、30-40歳くらいだったと考えられる。
6. 中身長か高身長の骨細い体格で、高顎で平坦な顔立ちをした、歯が大きい健常者の遺骨である。
7. まだ軟部組織に被われた上半身だけが、頭をしたにして井戸に沈んだ可能性が高い。そうした状況がなぜ生じたのかは、永遠に謎である。

〈謝辞〉

この人骨資料を検査する機会をいただいた奈良県天理市教育委員会、年代測定をしていただいた名古屋大学年代資料測定センターの中村俊夫助教授、顔の復原図を描いていただいた中村仁氏、骨の整理を手伝っていただいた井手あかね氏には心から御礼申し上げたい。

〈引用文献〉

- Baba, H., Shigehara, N. and Hanihara, K.: Human skeletal remains of Yayoi period from the Karako-Kagi site in Nara.
人類学雑誌、98:181、1990.
- 岡本辰之輔：現代畿内日本人々骨の人類学的研究—第六部 脊椎骨に就きて。
人類学雑誌、45（第2附録）：9-149、1930。
- 現代日本人頭骨研究班：「現代日本人頭骨の地理的変異に関する総合調査報告」、
文部省科学研究費補助金、総合A研究報告、1981。
- 池田次郎：東海西部・近畿・瀬戸内の弥生時代人骨。「日本民族・文化の生成」
(永井昌文教授退官記念論文集)所収、六興出版、19-33頁、1988。
- 池田次郎：河内・国府遺跡の人骨。「権原考古学研究所論集 第十」
(権原考古学研究所編)所収、425-450頁、1988。
- 内藤芳篤：弥生時代人骨。「人類学講座5 日本人I」
(人類学講座編纂委員会編)所収、雄山閣出版、57-99頁、1981。

〈付記〉

奈良県天理市長寺遺跡から出土した人骨の年代測定

中 村 俊 夫 (名古屋大学年代測定資料センター)

測定結果 :

試料番号	試料材料	骨試料量 (mg)	コラーゲン収量	GCの $\delta^{14}\text{C}$ CPDB (‰)	GCの ^{14}C 年代値 (yrBP) (±1σ)	曆年代較正值 (1σ range) *(probability)	測定コード番号
SE-2	肋骨の破片	1007.27	GC:73.72(7.32%) SC:16.62(1.65%)	-21.06	2473±63	762-622BC (57.3%) 600-505BC (37.9%) 438-426BC (4.8%)	NUTA-4074

GC:gelatin collagen; SC:solution collagen

注意事項

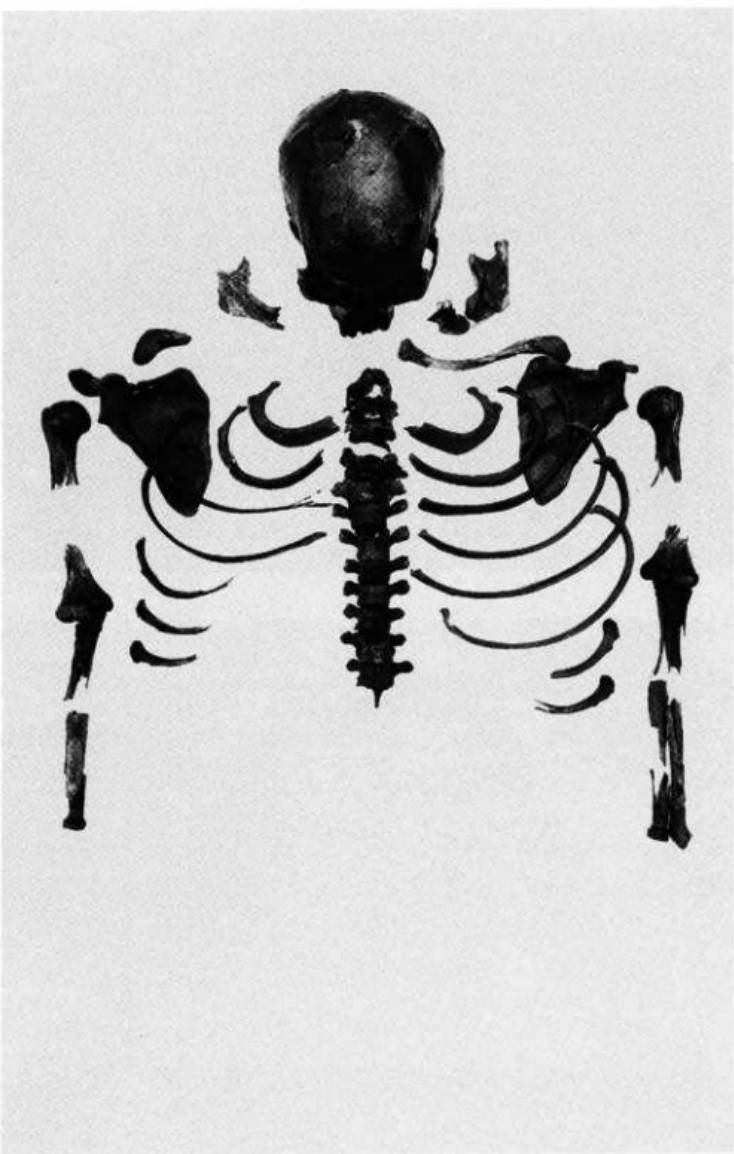
- ^{14}C 年代値はy.B.P.の単位で、西暦1950年から過去へ遡った年代値で示されます。
- ^{14}C の半減期として、国際的に用いられているLibbyの半減期5,568年を用いて ^{14}C 年代値を算出しました。
- ゼラチンコラーゲンの $\delta^{14}\text{C}$ CPDB値を測定して、炭素同位体分別の補正を行いました。
- 年代値の誤差はone sigma (1 σ; 1 標準偏差) を示しました。これは、同じ条件で測定を100回繰り返したとすると、測定結果が誤差範囲内に入る割合が68回である事を意味します。誤差を表示の2倍 (2 σ; 2 標準偏差) にとると、誤差範囲に入る割合は95回になります。
- ^{14}C 年代値から曆年代への較正は、樹木年輪についての ^{14}C 濃度測定から得られた較正データを用います。ここでは、スイス・中間エネルギー研究所・ETHのAMS (加速器質量分析) 実験施設で開発された較正プログラムであるCalib ETH1.5b (1991) を用いて較正を行いました。
- 曆年代は、年代範囲で示されます。真の年代が、表示されたすべての範囲のどれかに入る確率が68% (1 σ) です。年代範囲の後に示された確率は、68%のうちで、さらに特定の年代範囲に入る確率を示します。
- 疑問点は年代測定責任者までお問い合わせ下さい。

第5章 おわりに

長寺遺跡の発掘調査は、平成8年度すでに第15次調査にも及んでいる。特に天理市立様本公民館および市立様本幼稚園の北側から西側近接地にかけて発掘調査が集中しており、長寺遺跡の内部をおよそ300mにわたって南北に縦断する形で発掘を繰り返したことになる。長寺遺跡は、奈良盆地の東山麓から平野部に向かって東西にのびる地形に立地しており、これまでの発掘調査で2本の谷筋地形と3方のなだらかな尾根筋状の地形を検出している。弥生時代中期の遺跡は、谷筋を挟みながら地形に別れて柱穴や土坑、井戸遺構などが所在している。人骨が出土した長寺遺跡第10次調査の地点は、偶然にも弥生時代に所在した谷筋地形に調査区を設定したものであるが、弥生時代中期の大形井戸（SE-2）の所在や、谷筋地形にともなう包含層から多量の土器類（弥生中期・弥生後期終末～古墳時代前期）が出土している。遺跡の範囲がさらに西方へ広がる様相には、長寺遺跡の集落の規模を検討する意味においては意義深い調査であった。

調査区の北端部で検出した弥生時代中期の大形井戸（SE-2）は、谷筋地形に掘り込まれていた井戸で、谷筋内を流れる流路に接していた。長寺遺跡における過去の調査例では微高地に遺構があり、ピットや土坑が集中する居住地に井戸が認められるが、第10次調査で検出した大形井戸は、居住地と異なるものであった。井戸の上半部から木器や加工木などが出土しているため、水汲み場として利用されていた井戸が機能を停止した後に、木製品の加工場として利用されていた様子である。人骨は井戸底から出土しており、井戸が水汲み場として機能していた段階に混入したものと推測され、出土した土器類から大和第III-4様式、従来の編年観では畿内第4様式の前半にあたる人骨と思われる。両腕を含め頭部から胸部かけて身体の上半部が依存し、調査時の記憶から逆さ状態に転落していたように思われる。井戸内部からは小形の完形土器が8層から出土しており、井戸祭祀の痕跡が認められた。しかし、これと人骨の関係は定かでない。推測になるが調査担当の意見を述べるならば、完形土器をおさめた井戸祭祀よりも前に人骨が混入していたように感じられる。人骨は骨格の特徴から30～40歳の女性と判断され、鑑定ではc14年代測定法によるとBC426～BC438年が得られている。出土した土器との共伴関係においては弥生時代中期後半に求められるが、鑑定から得られた年代と土器の年代観とではずれが認められる。

現在この人骨はアセトンで溶解したパラロイドB72を付着させて保存処理を完了している。



保存処理後に撮影したもの。
前腕の骨は左右が逆になっている。



遺構の検出状況（北方から）



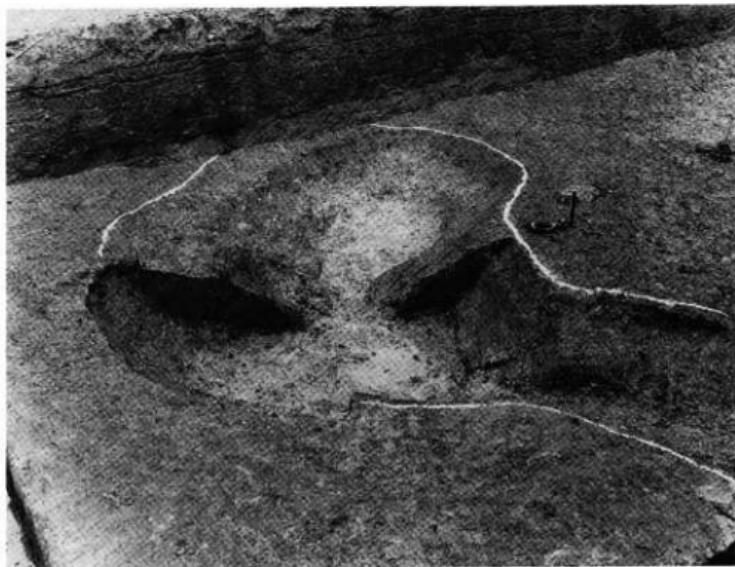
大形土坑 1. と谷地形（北方から）



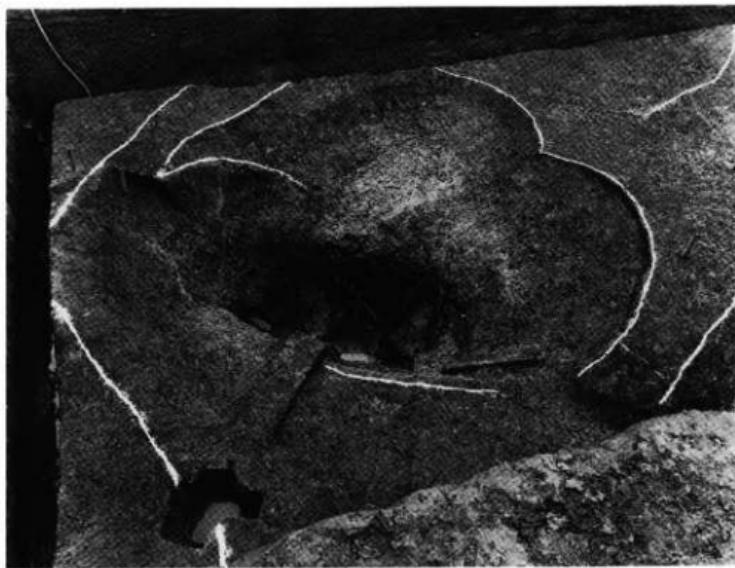
弥生時代中期の谷地形（南方から）



弥生時代中期SE-2 井戸遺構（北方から）



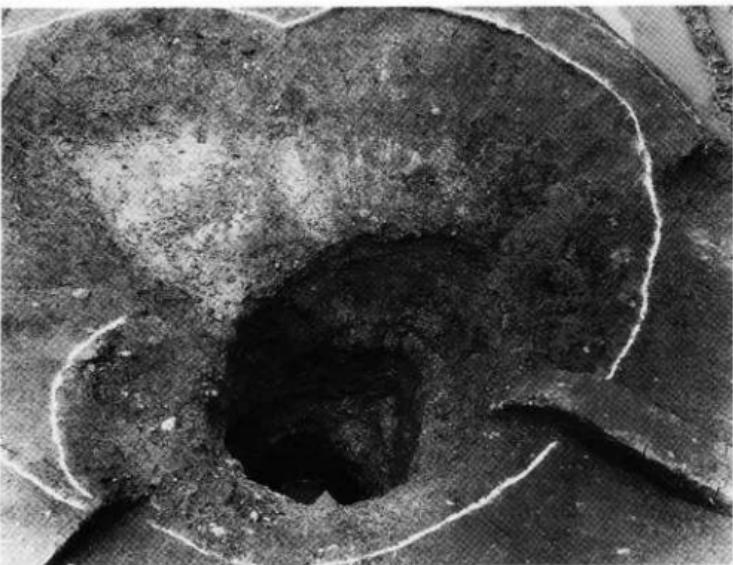
大型土坑1とその下部で検出した井戸遺構の様子・5層（西から）



井戸6～7層の掘り下げと木製品の検出（西から）



井戸7層下位の掘り下げと鍛形木製品の検出（北から）



井戸完掘と全景（北から）



井戸 6 層の検出と木製品の出土状況（北方から）



井戸 6・7 層の検出と木製品の出土状況（北方から）



井戸 6～7 層下位の検出と鍛形木製品の出土状況（北方から）



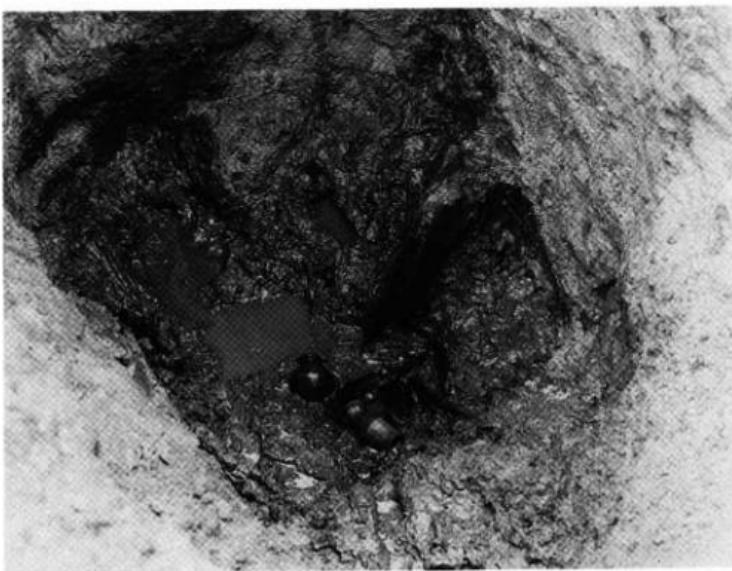
井戸遺構から出土した鍛形木製品



井戸 8 層の検出と一括土器の出土状況（南方から）



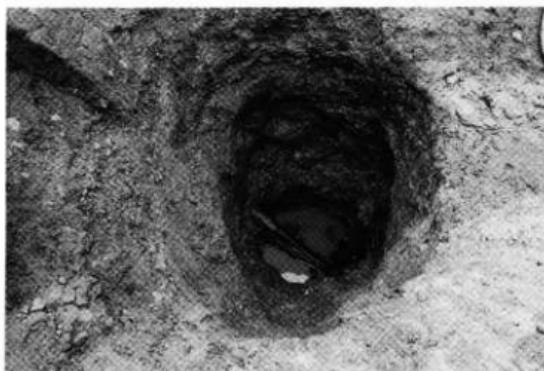
井戸 8 層の検出と足場板の出土状況（南方から）



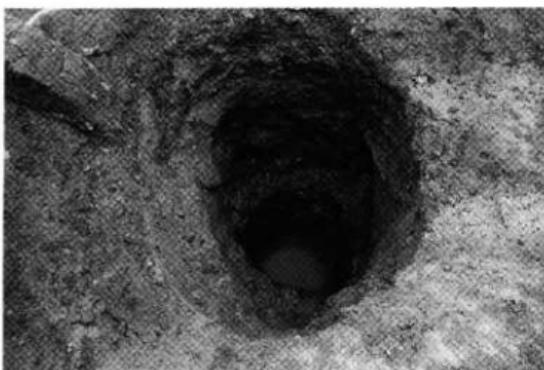
井戸 8 層から出土した一括土器（西方から）



井戸 8 層から出土した泥除木製品と足場板（南方から）



SE-2・井戸造構
10層の掘り下げ前
(南方から)



SE-2・井戸造構
10層の掘り下げ後
(南方から)



SE-2・井戸造構
井戸の掘り下げ完了後
全景 (南方から)



SE-2・井戸遺構
10層から出土した人骨
(西方から)



SE-2・井戸遺構
10層から出土した人骨
(南方から)



SE-2・井戸遺構
出土した頭蓋骨



頭蓋骨の左斜めの側・前面観



頭蓋骨の前面観

高額で眼窩が高く大きく、梨状孔は広いが鼻骨は小さい。



頭蓋骨の左側面観

顔面の平坦さが目立つ。こちら側の乳様突起は円く大きい。



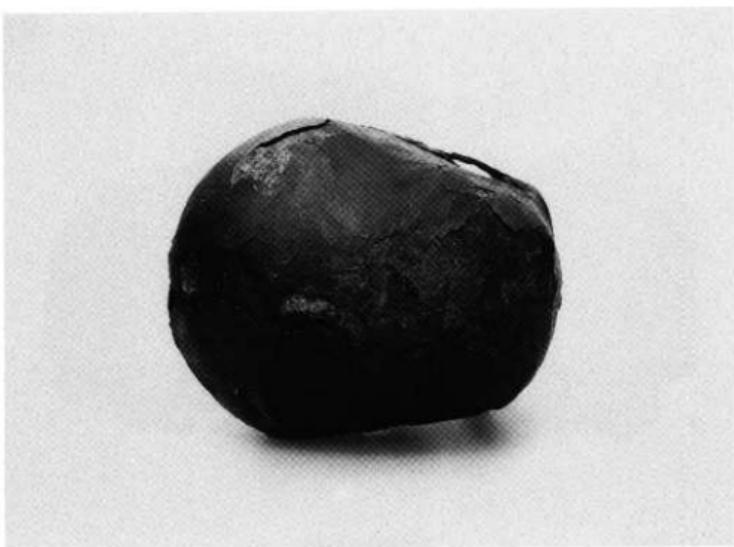
頭蓋骨の後面観

矢状縫合や人字縫合はほとんど縮合しない。

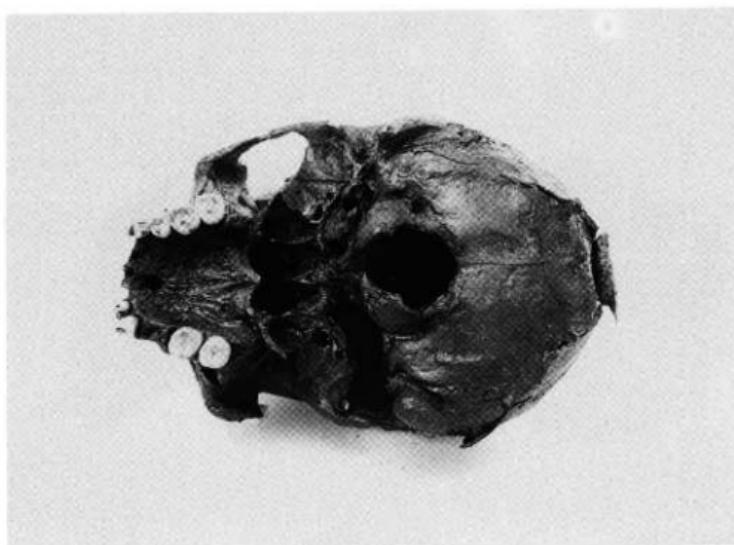


頭蓋骨の右側面観

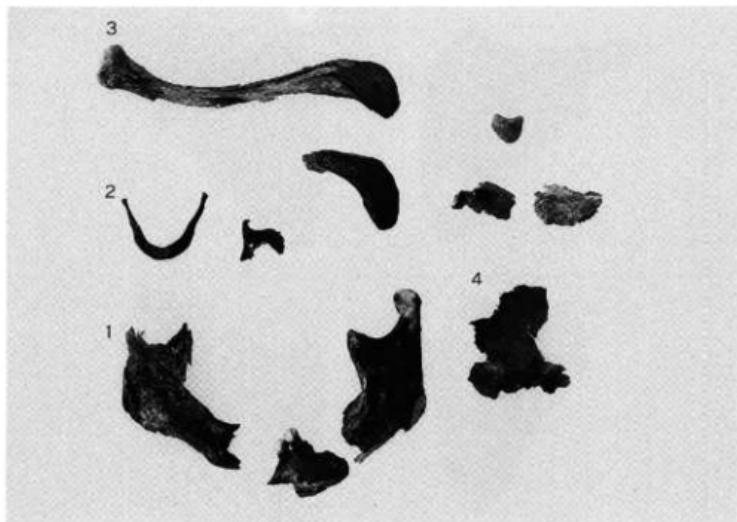
曲摺性の突顎を示す。こちら側の乳様突起は小さい。



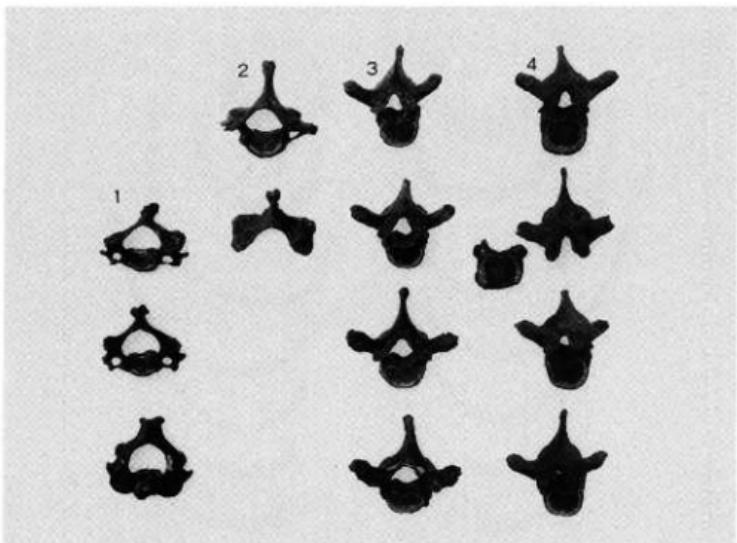
頭蓋骨の上面観
後半部が円味を帯び、前頭隆起がよく発達している。



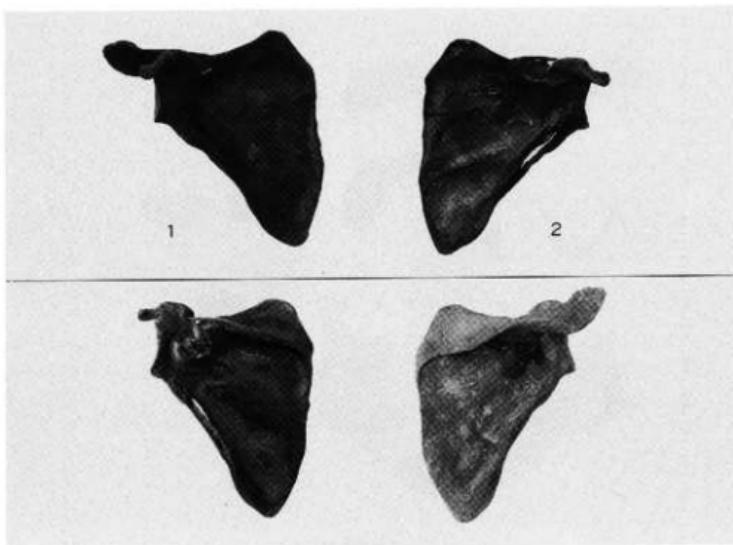
頭蓋骨の底面観
左第一臼歯と左右の第三大臼歯は先天的に欠如していたこと、そして全体に歯が大きいことがわかる。



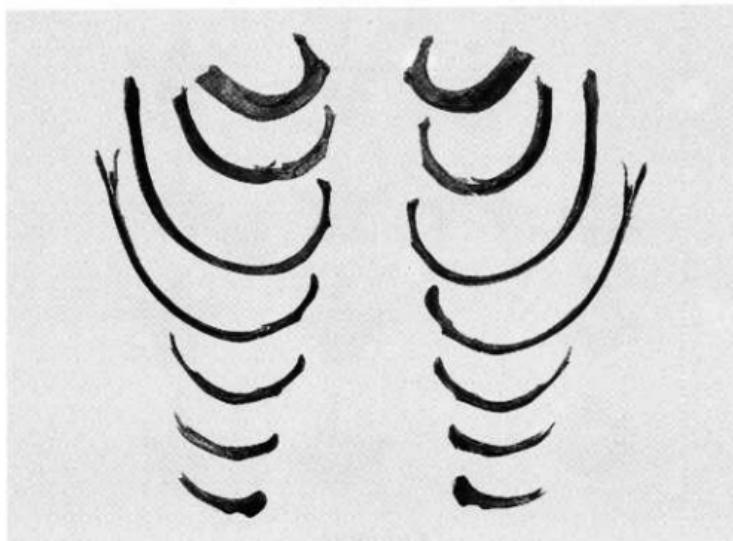
出土人骨の部分片
(1)下顎骨 (2)舌骨 (3)顎骨 (4)側頭骨の破片



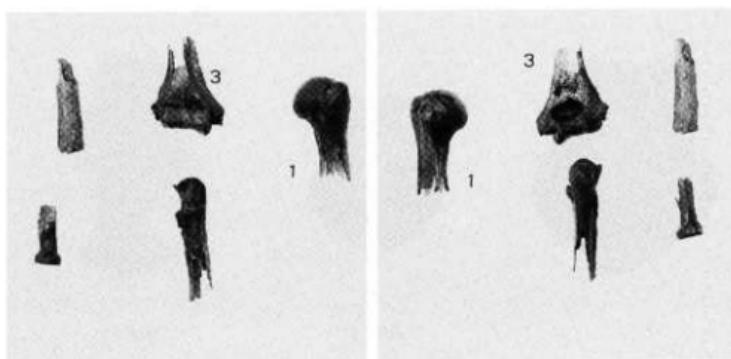
残存する脊椎骨
(1)第2～4頸椎 (2)第6～7頸椎 (3)第1～4胸椎 (4)第5～8胸椎
この他に破損した環椎が残っていた。



出土人骨の肩甲骨
(1)左肩甲骨 (2)右肩甲骨

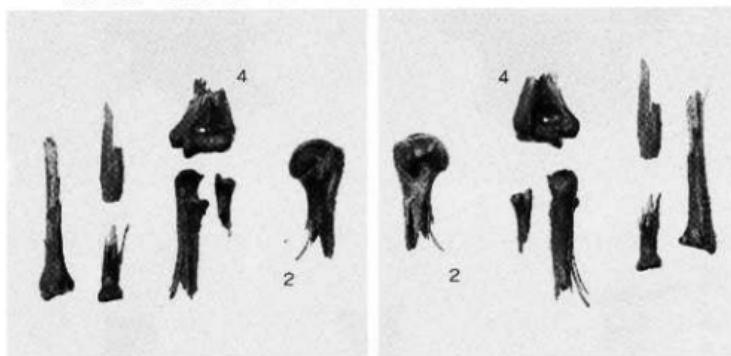


出土人骨の残存する鎖骨
左右ともに下位の仮肋はまったく存在しない。

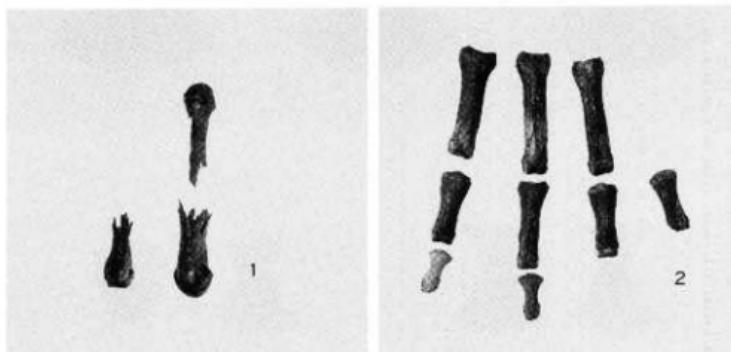


残存する上肢骨の断片と尺骨。

(1)右上腕骨の近位部 (2)左上腕骨の近位部 (3)右上腕骨の遠位部 (4)左上腕骨の遠位部



上腕骨の他に尺骨も写っている。左右、上下は不揃。



残存する手骨

(1)中手骨 (2)指骨 他に手根骨が1個あった。



図 7-1



図 8-17



図 8-18



図 8-12



図 7-7



図 8-19



図 7-4



図 7-5

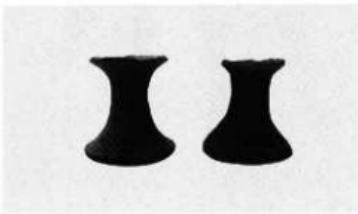


図 8-13

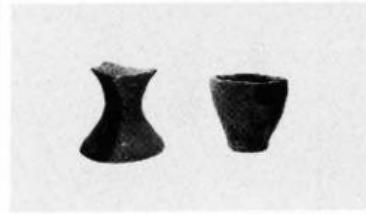


図 8-20



図 7-3

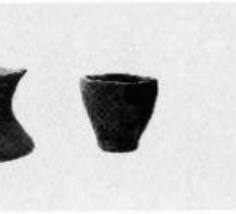
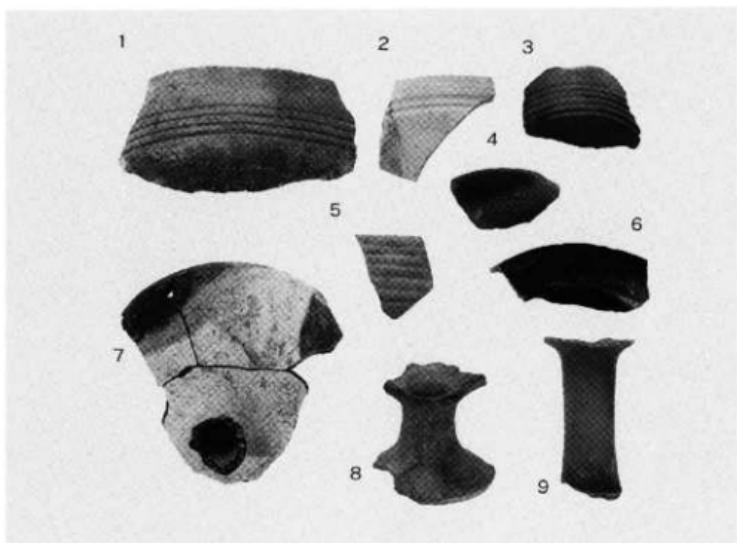
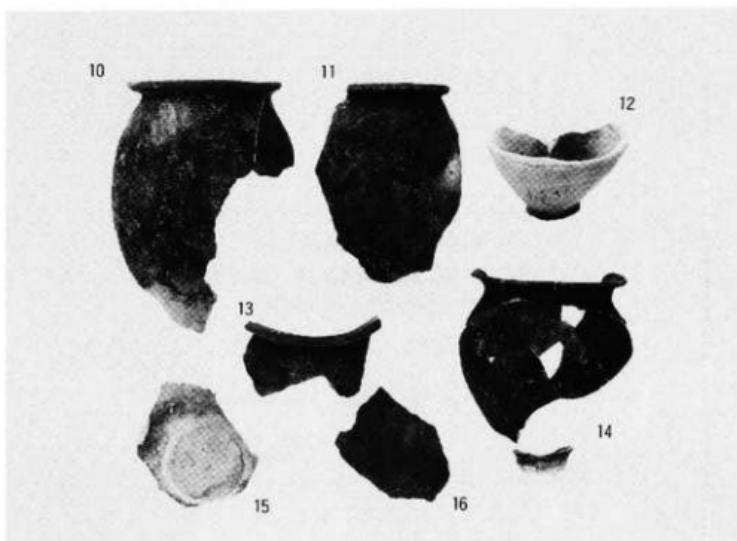


図 8-16



1. 図 8-15 2. 図 8-23 3. 図 8-14 4. 図 7-6 5. 圓なし
6. 図 7-9 7. 図 7-2 8. 圓なし 9. 図 7-10



10. 図 8-22 11. 図 8-21 12. 圓なし 13. 図 7-8
14. 図 9 15. 圓なし 16. 圓なし

天理市埋蔵文化財調査報告第5集
長寺遺跡の弥生人骨
—第10次調査に伴う中間報告書—

発行日 平成8年12月25日◎

発行編集 天理市教育委員会
〒632 天理市川原城町605番地

印刷 豊天理時報社
天理市植葉町80番地
